東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（CEDEP）・
ベネッセ教育総合研究所　共同研究

乳幼児の生活と育ちに関する調査 2017－2023

０歳～６歳

【ダイジェスト版：データ集】

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（CEDEP）とベネッセ教育総合研究所は、子どもの成長のプロセスを明らかにするための縦断調査（追跡調査）を共同で進めています。

本冊子は、０歳児期から６歳児期（小学校１年生）の主な結果をまとめたものです。

目 次

1. 子どもの生活と発達

生活リズム …… P. 6
生活時間 …… P. 7–8
メディアの使用時間 …… P. 9
メディアとのかかわり …… P. 10
メディアの使い方 …… P. 11
認知的な発達 …… P. 12
社会情動的な発達 …… P. 13–14
小学校での様子・家での学習態度 … P. 15

2. 保護者の生活と子育て

子育ての時間と分担 …… P. 16
家事の時間と分担 …… P. 17
子育てに対する意識 …… P. 18
子育てで頼りにしている人 …… P. 19
デジタルメディアに対する価値観 … P. 20
子育て・教育に対する価値観 …… P. 21
学校環境への評価 …… P. 22
母親・父親の働く環境 …… P. 23

2024年10月

The Center for Early Childhood Development, Education, and Policy Research

ベネッセ教育総合研究所

「乳幼児の生活と育ち」研究プロジェクトについて

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（CEDEP）とベネッセ教育総合研究所は、乳幼児の生活や発達について、縦断的に研究するプロジェクトを共同で立ち上げ、研究を進めてきております。本ダイジェスト版では、この研究プロジェクトの一環としておこなった「乳幼児の生活と育ちアンケート」の調査結果をご紹介します。

研究プロジェクトの特徴

1 子どもの生活や発達、保護者の子育ての「今」をとらえることができる

このプロジェクトでは、2016年度に生まれた子どもをもつ保護者（調査モニター）に対して、毎年1回継続して調査を実施します。これにより、子どもの生活や発達、保護者の子育ての実態などの「今」の様子を明らかにできます。

2 子どもの成長・発達の「プロセス」をとらえることができる

このプロジェクトでは、子どもが毎年どのように成長・発達していくのか、また保護者のかかわりや意識はどのように変化したり、子どもの成長・発達に影響を与えたりするのかといった、親子の成長・発達の「プロセス」を明らかにできます。特に、2023年の調査では、対象のお子様が小学校に入学し、それまでの園を中心とした生活からの変化を確認することができます。

3 母親・父親の意識や養育行動について幅広くとらえることができる

調査実施にあたり、調査票を世帯単位で配布して、保護者2名（母親・父親）に回答を依頼しています。そのため、子育ての時間や分担、子ども・子育てに対する意識について、母親・父親の共通点や相違点、またその変化を幅広くとらえることができるとともに、夫婦関係が子どもの成長・発達に与える影響なども明らかにできます。

調査概要

目　的	2016年度に生まれた子どもをもつ保護者に、年1回の追跡調査をおこなうことで、子どもの生活や発達と保護者の子育ての変化を知り、よりよい子育て支援を考える。
調査時期	第1回目の2017年から毎年9月～10月に実施
調査方法	郵送法(自記式質問紙調査)
対　象	全国の2016年4月2日～2017年4月1日生まれの子どもをもつ家庭3,205世帯(調査モニター)から開始し、1歳児期以降は前年に回答があった世帯のみに調査を依頼。(なお、このダイジェスト版では6歳児期すべてに回答があった母親1,402名、父親1,024名を対象に分析をおこなっているため、0歳児期から5歳児期までの結果については、これまでの発表と数値が異なります。)

(単位：人)

	0歳児期 (0歳6か月~1歳5か月)	1歳児期 (1歳6か月~2歳5か月)	2歳児期 (2歳6か月~3歳5か月)	3歳児期 (3歳6か月~4歳5か月)	4歳児期 (4歳6か月~5歳5か月)	5歳児期 (5歳6か月~6歳5か月)	6歳児期 (6歳6か月~7歳5か月)
発送世帯数	3,205	3,021	2,673	2,245	1,898	1,667	1,673
母親	2,975	2,409	2,119	1,906	1,678	1,529	1,402
父親	2,624	2,038	1,754	1,537	1,308	1,134	1,024

※数値は分析対象者数

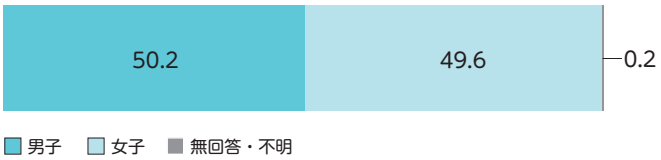
本ダイジェスト版では
調査結果から２つのポイントをご紹介します

子どもが０歳児期から６歳児期になるまで、継続して毎年の調査に
ご協力いただいたご家族の「今」と「変化」を通して、
子どもの育ちと少子化時代の子育ての在り方を探ります

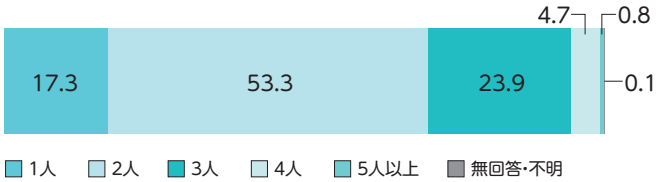
基本属性（子ども、６歳児期）

※このページ以降、「父親」「母親」と明記していない表･グラフは、すべて母親（６歳児期の調査に回答のあった 1,402 名）による回答の結果。
※数値は、構成割合（％）を示している。
※図表で使用している百分率（％）は、小数第２位を四捨五入して算出している。四捨五入の結果、数値の和が 100.0 にならない場合がある。
※図２－７については、小数第１位を四捨五入して整数にしている。

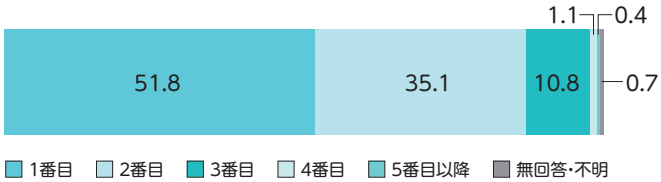
● 子どもの性別



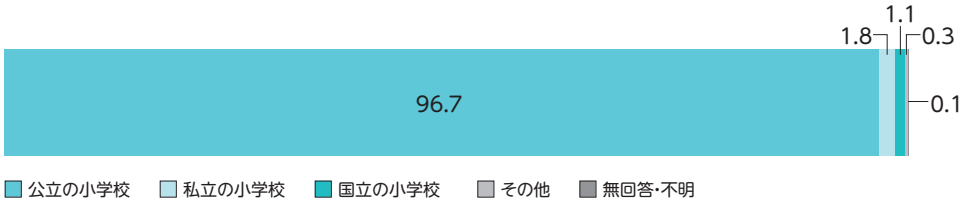
● 子どものきょうだい数
（対象の子どもも含めた人数）



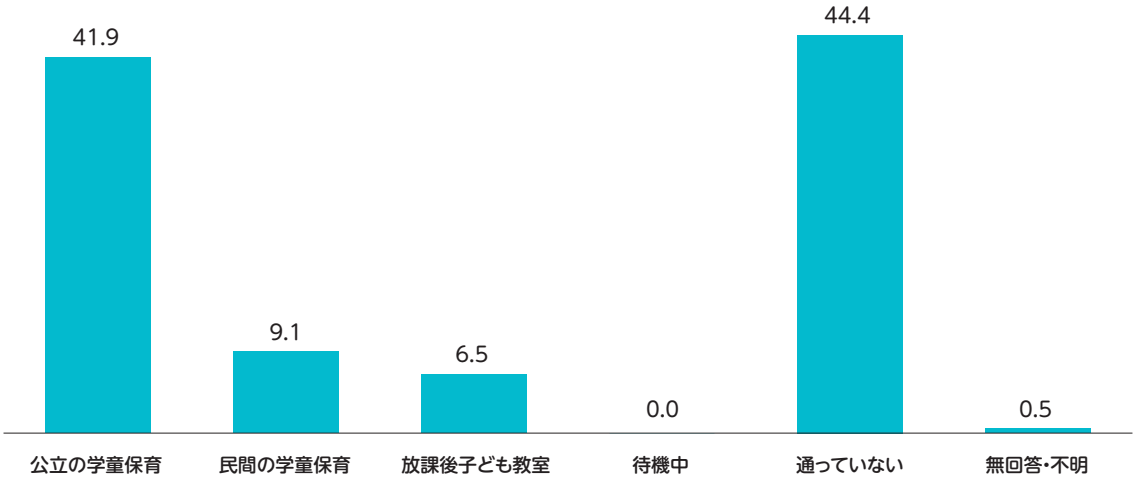
● 子どもの出生順位



● 通っている小学校種

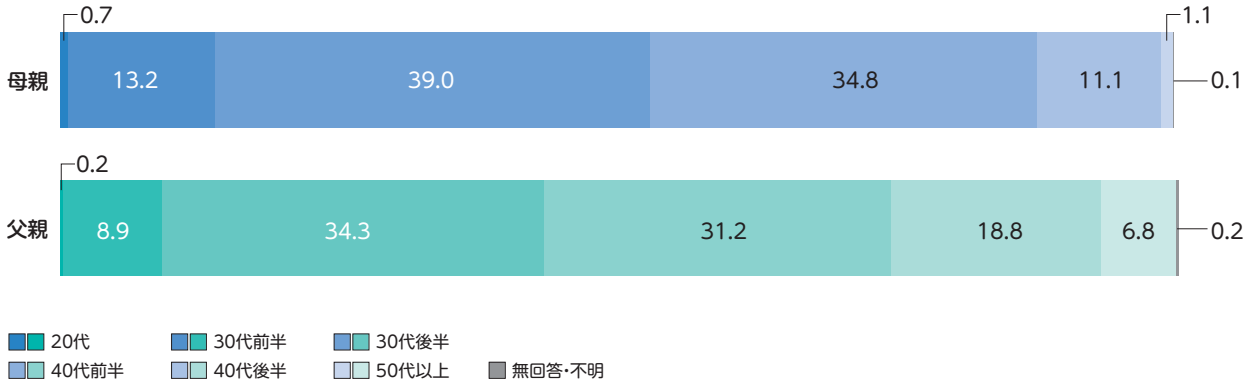


● 学童保育等（放課後過ごす場所）の利用

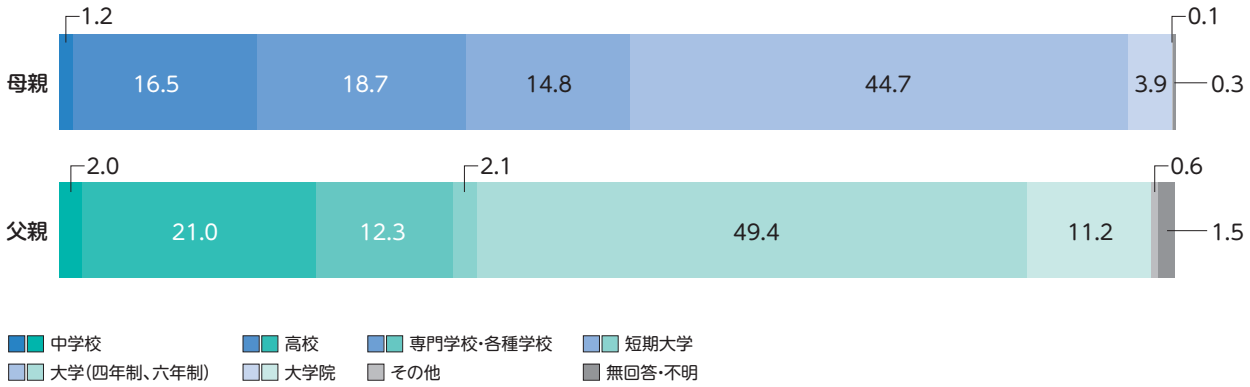


基本属性（母親・父親・世帯）

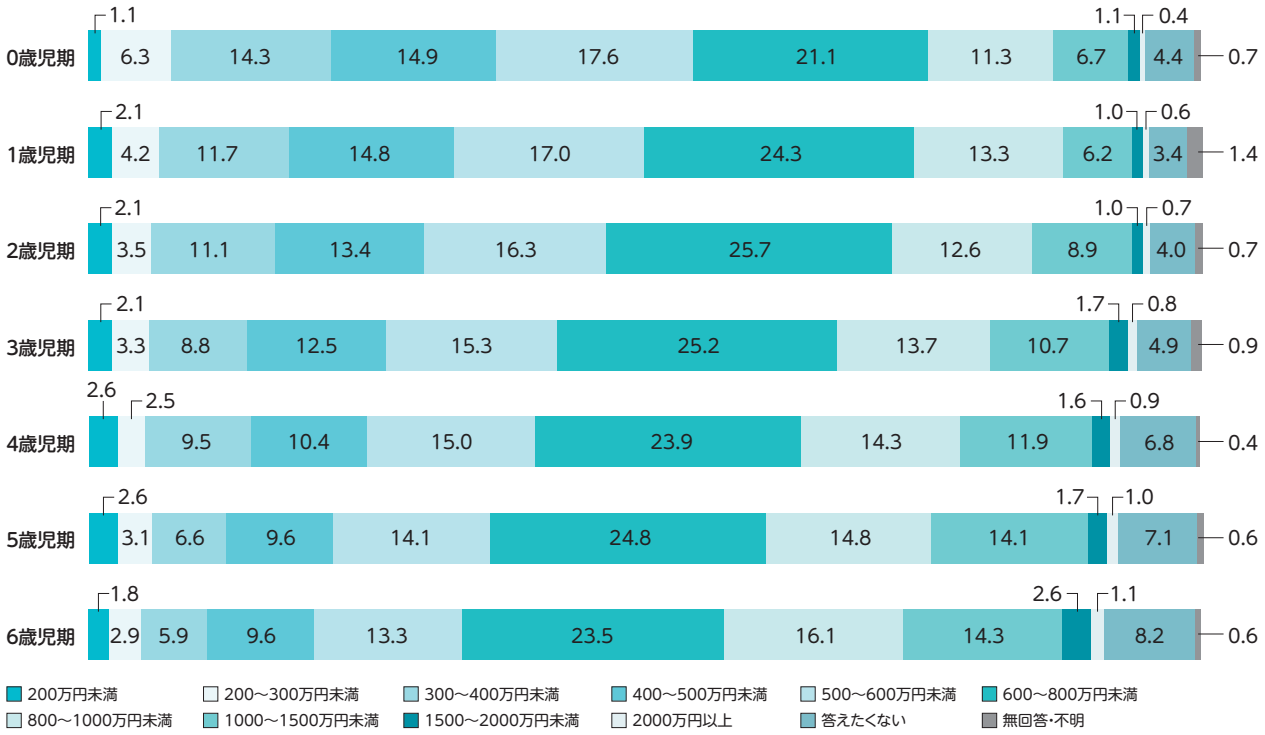
保護者の年齢（６歳児期）



保護者の最終学歴



世帯年収



生活リズム

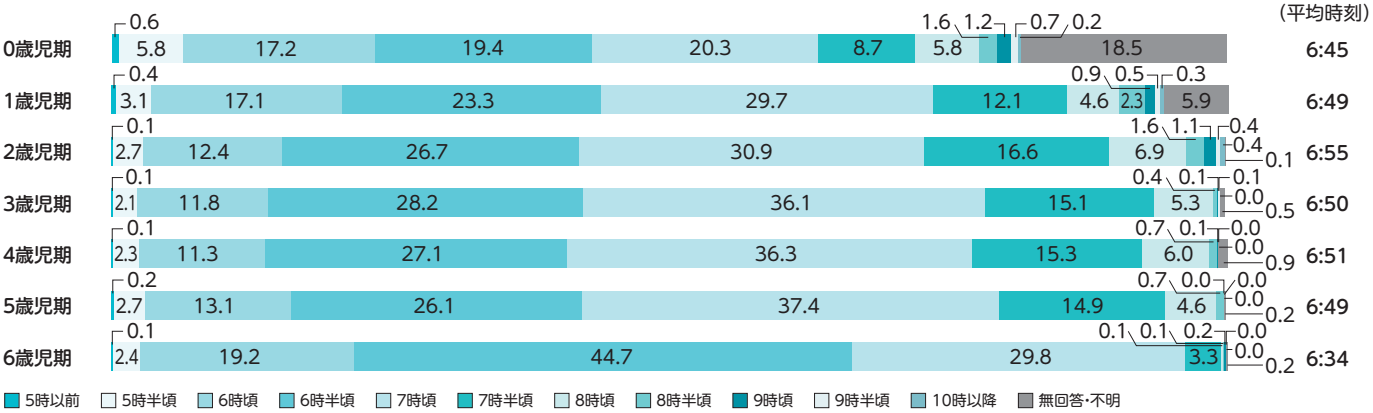
起床時間は、５歳児期までで７時頃、６歳児期で６時半頃がもっとも多い。６歳児期（小学生）になると、起床時刻が早まる。

０歳児期には、起床時刻と就寝時刻は分散している。１歳児期以降では、起床時刻は５歳児期まで「７時頃」がもっとも多く、回答する時間帯が広い。６歳児期になると「６時半頃」がもっとも多く、回答する時間帯が狭くなる。この理由として、登園時間は就園状況によりさまざまであるが、小学校の登校時間は一律であることが考えられる。一方、就寝時刻はほぼ変わらない。

決まった時間に起きるのは、２～６歳児期で「とてもあてはまる」「あてはまる」という回答が９割を超え（図１－３）、決まった時間に寝るのは、４歳児期以降、「とてもあてはまる」「あてはまる」という回答が９割を超える（図１－４）。子どもの多くが、幼児期に起床・就寝リズムがある程度整う様子がうかがえる。

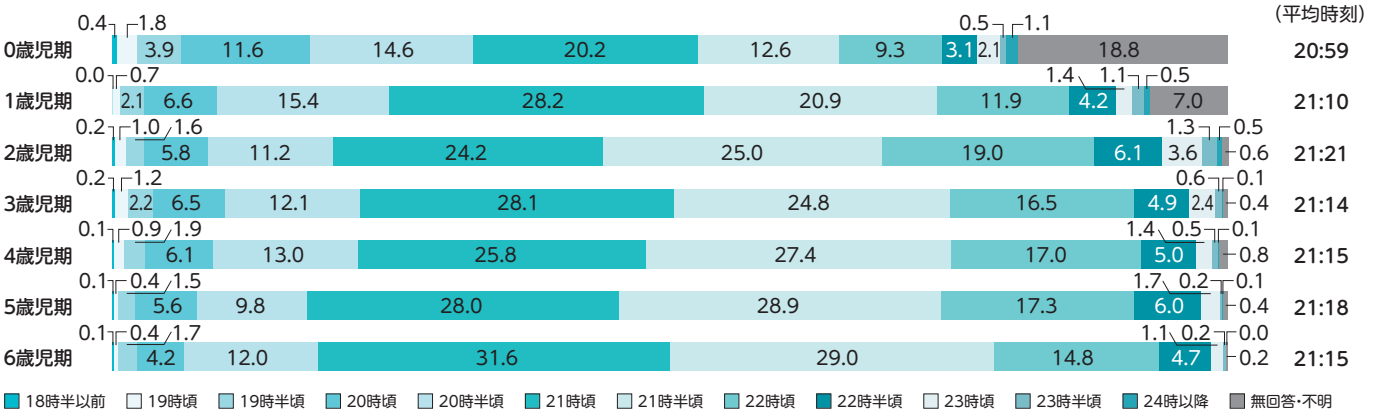
Q 対象のお子様は平日、何時頃に起きますか。

図１－１ 平日起床時刻 (%)



Q 対象のお子様は平日、何時頃に寝ますか。

図１－２ 平日就寝時刻 (%)



Q 対象のお子様について、以下はどれくらいあてはまりますか。

図１－３ 朝、決まった時間に起きる (%)

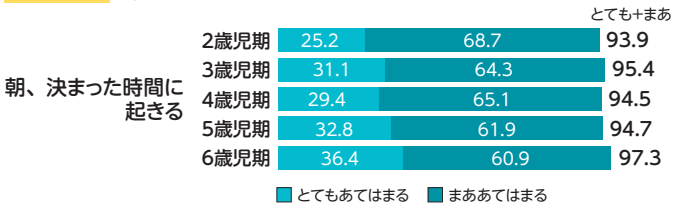
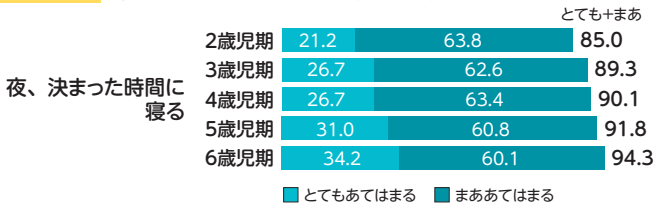


図１－４ 夜、決まった時間に寝る (%)



外遊びと絵本や本を読む時間は、１歳児期がもっとも長く、テレビや DVD を見る時間は２歳児期がピーク。

０歳児期は、外遊びと絵本や本を読む時間、テレビやDVDを見る時間のいずれも分散している。

外遊びの平均時間は、１歳児期(58.5分)、２歳児期(48.8分)、３歳児期(35.6分)と成長とともに大きく減っていく。絵本や本を読む時間は、1歳児期(32.6分)から２歳児期(23.9分)にかけて大きく減り、３歳児以降は半数が「15分間くらい」である。一方、テレビやDVDの視聴時間は、１歳児期(84.5分)から２歳児期(90.1分)に増え、2歳児期でもっとも長い。テレビやDVDを見る時間は就園や就学を機に減ると考えられる。

Q 対象のお子様は、平日に家庭で以下を１日あたりどれくらいの時間、見たり使ったり、おこなったりしていますか。

図１－５ 外遊び (%)

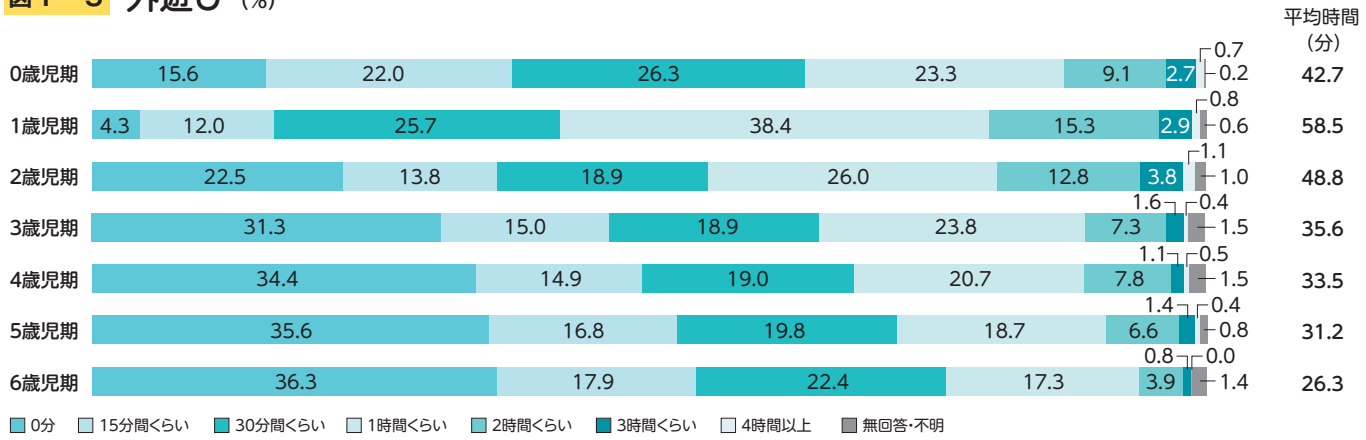


図１－６ 紙の絵本や本 (%)

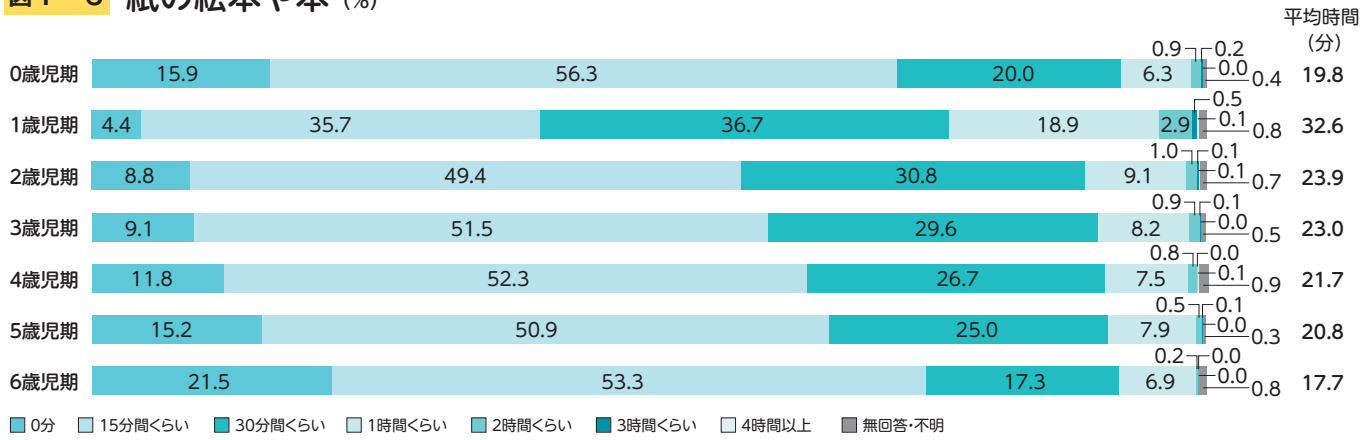
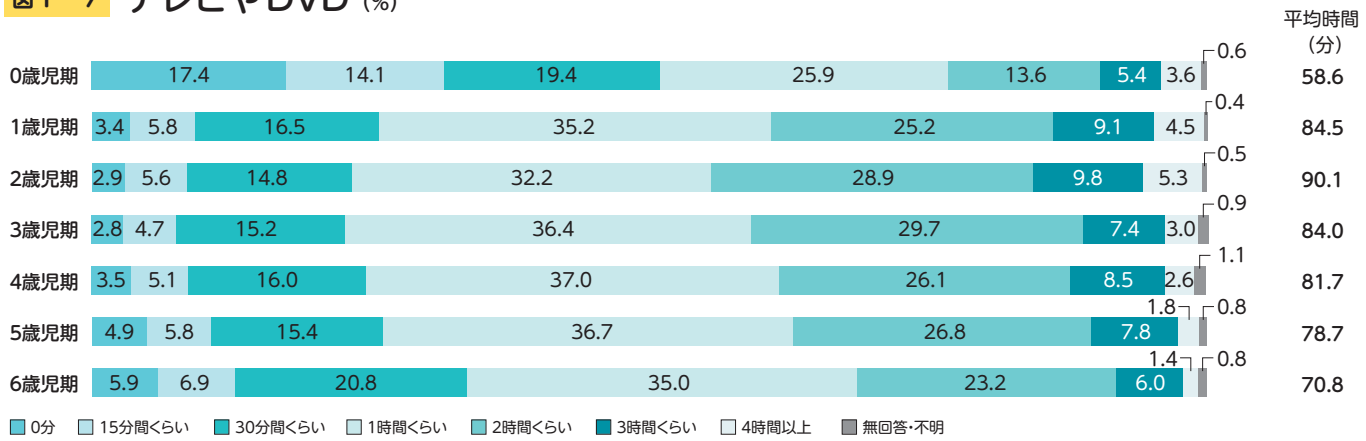


図１－７ テレビやDVD (%)



６歳児期の約８割は習い事をしている。家庭での学習時間は「30分間くらい」がもっとも多い。

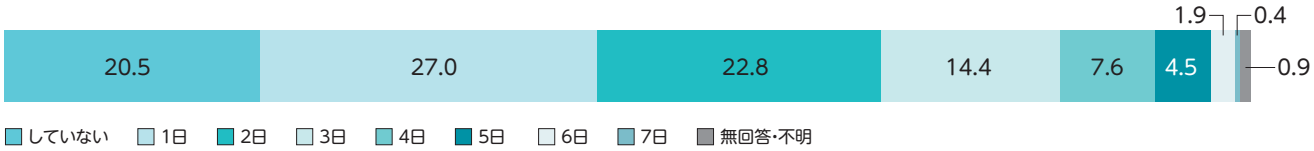
６歳児期には、約８割が習い事をしており、頻度は「１日」か「２日」が半数である。一方、学習塾への通塾は15％程度にとどまる。小学校での体育の授業以外で体を動かすことをしているのは８割以上であり、頻度は「１日」か「２日」で約４割を占めている。

家庭での学習時間は、「30分間くらい」が42.8％ともっとも多く、「ほとんどしない」から「１時間くらい」までを合わせると９割にせまる。

Q 対象のお子様は、習い事をしていますか。

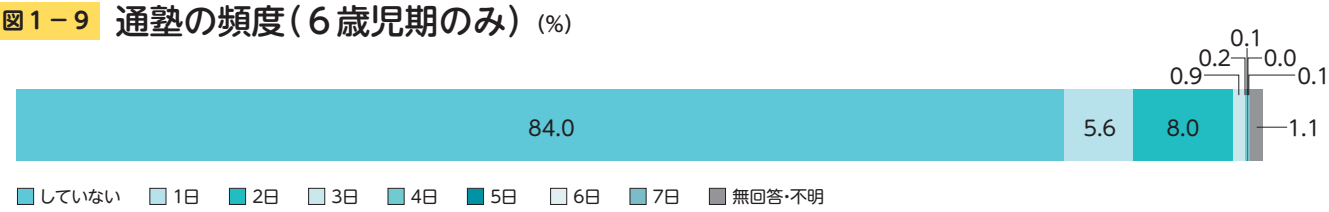
※習い事：親子で習っているものや有料で習っているもの、スポーツクラブへの参加など
※通信教育は除く

図１－８ 習い事の頻度（６歳児期のみ）(%)



Q 対象のお子様は、学習塾に週に何日か通っていますか。

図１－９ 通塾の頻度（６歳児期のみ）(%)



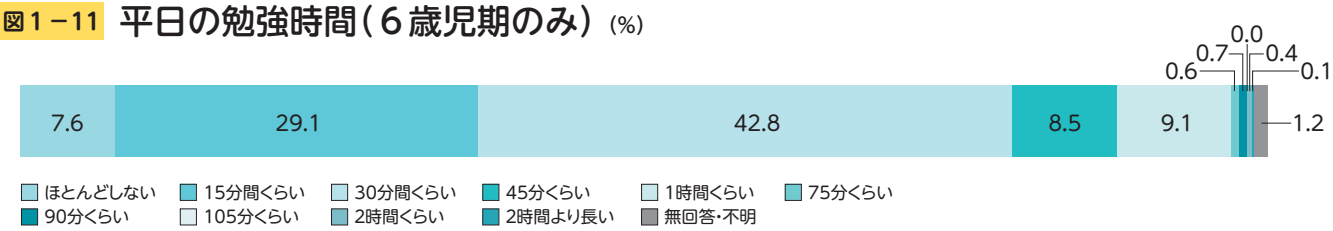
Q 対象のお子様は、学校での体育の授業以外で体を動かすことをしていますか。

図１－10 体を動かす頻度（６歳児期のみ）(%)

Q 対象のお子様は平日、家でどれくらい勉強していますか。

※塾やオンラインのリアルタイム講座での勉強時間は除く

図１－11 平日の勉強時間（６歳児期のみ）(%)



メディアの使用時間

スマホ、タブレット端末、ゲーム機の使用は２歳児期～６歳児期を通して半数以下。使用時間の平均は 30分未満だが、年齢が上がるにつれて長くなる。

「スマートフォン」と「タブレット端末」、「ゲーム機」を「家にない」または「０分」と回答した割合は、２歳児期から６歳児期にかけて半数以上である。また、１日の平均使用時間は、いずれのメディアも30分未満と短い。

１日の平均使用時間を見ると、「スマートフォン」の場合、２歳児期以降にあまり変化はみられないが、「タブレット端末」と「ゲーム機」は年齢が上がるにつれて平均使用時間が長くなる。

Q 対象のお子様は、平日に家庭で以下を１日あたりどれくらいの時間、見たり使ったりしていますか。

※平均時間は「家にない」を０分として算出した

図１－12 スマートフォン (%)

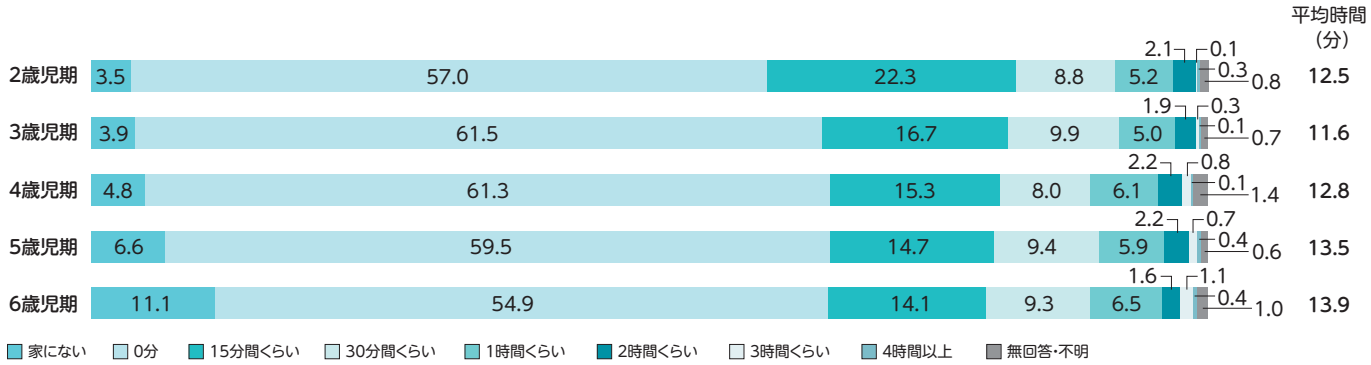


図１－13 タブレット端末 (%)

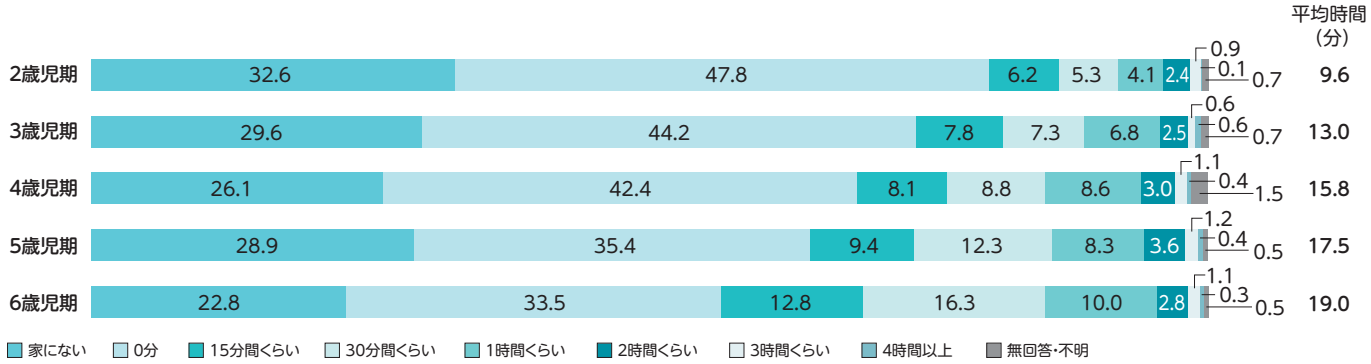
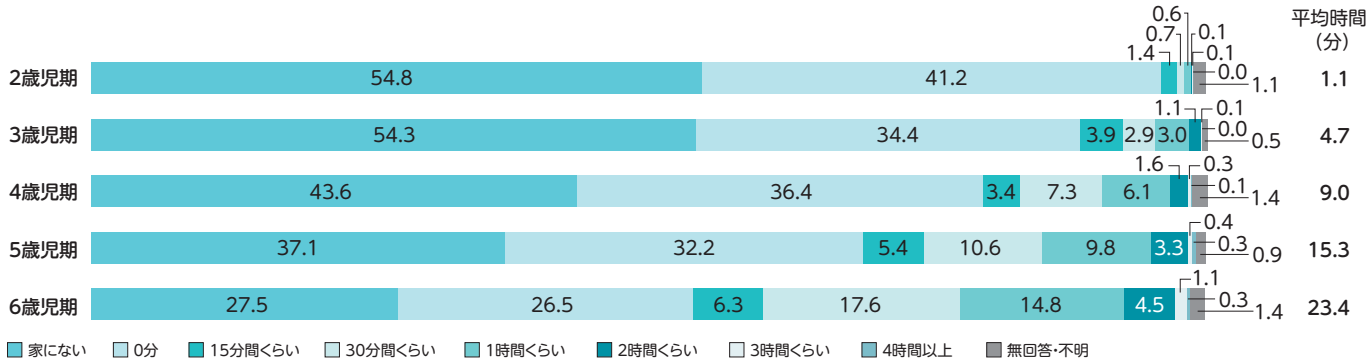


図１－14 ゲーム機 (%)



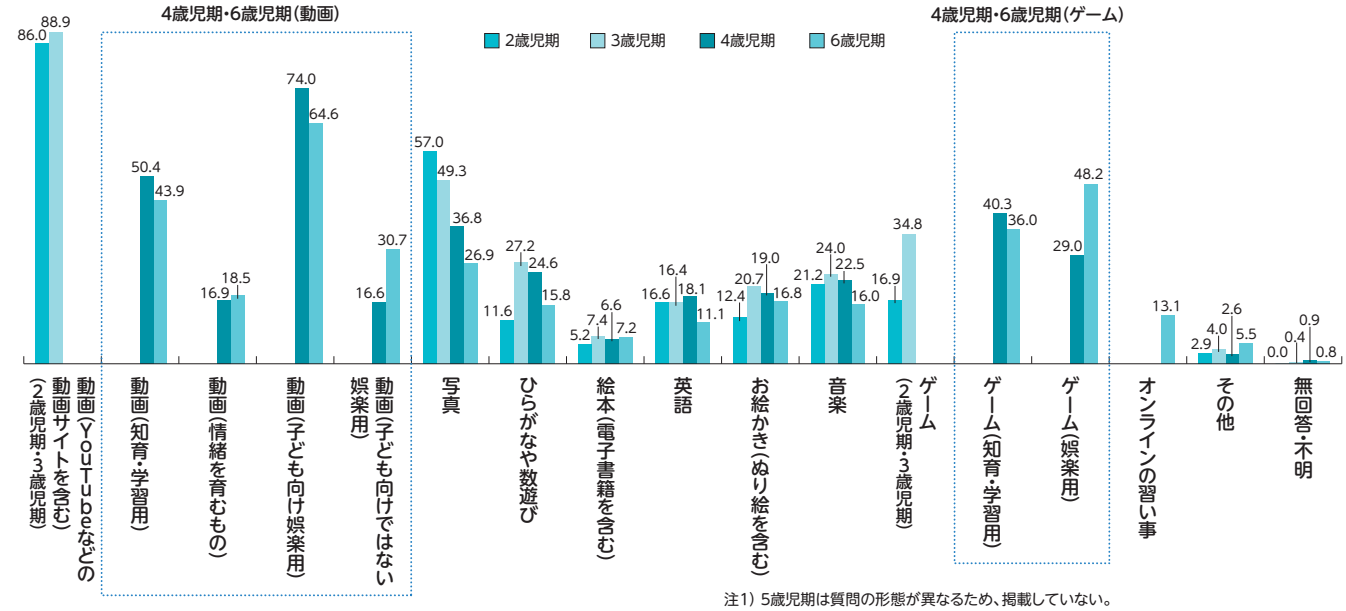
もっとも多く使うアプリは「動画」。使用させる理由でもっとも多いのは、「子どもが使いたがるから」。

デジタルメディアで使用しているアプリやソフトの種類は、「動画」がもっとも多く、２歳児期で86.0%、３歳児期で88.9%（図１－15）。４歳児期と６歳児期にたずねた動画の内容についての４項目のうち、利用しているものが１つでもある人の割合は、４歳児期で85.6%、６歳児期で85.9%であった（図表省略）。年齢が上がるにつれて「写真」は減り、「ゲーム」は２歳児期から３歳児期にかけて、「ゲーム（娯楽用）」は４歳児期から６歳児期にかけて増えている（図１－15）。４歳児期と６歳児期にたずねたゲーム２項目のうち、利用しているものが１つでもある人の割合は、４歳児期で53.9%、６歳児期で63.9%であった（図表省略）。

使用させる理由をみると、「子どもが使いたがるから」がもっとも多く、次いで、２歳児期と３歳児期では「家事などで手がはなせないときに便利だから」、４歳児期と６歳児期で「子どもが楽しめるから」が多い。デジタルメディアは、親が手がはなせないときに利用しつつ、子ども自身が楽しむものへと年齢によって変化していく。

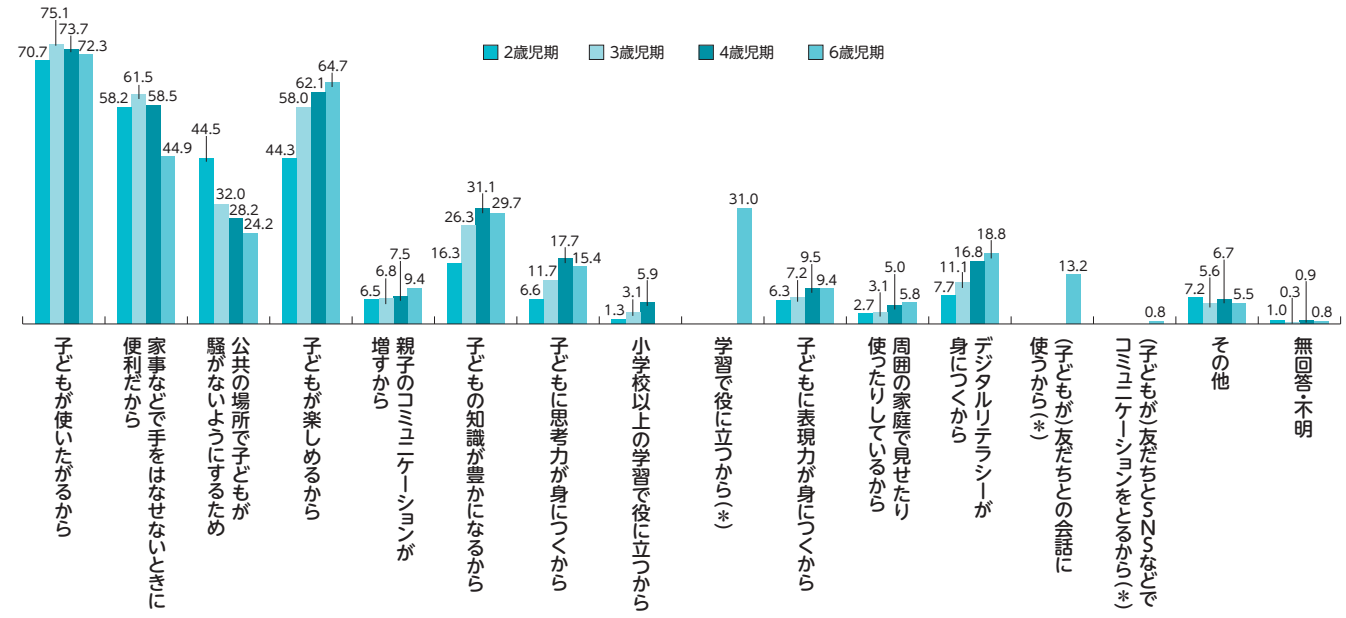
Q 対象のお子様のデジタルメディア（スマートフォンやタブレット端末。テレビと接続する場合も含む）の利用についてお聞きします。

図１－15 使用アプリやソフトの種類 (%)



注1）5歳児期は質問の形態が異なるため、掲載していない。
注2）動画とゲームについては、2歳児期・3歳児期と4歳児期・6歳児期では質問の形態が異なる。

図１－16 使用させる理由 (%)



＊6歳児期のみでたずねた項目
注）5歳児期は質問の形態が異なるため、掲載していない。

メディアの使い方

9割以上の親子が、スマホとタブレット端末の使い方を約束している。約3割の保護者は、1日に数回以上、食事中に自分のスマホの確認をする。

スマートフォンとタブレット端末を使うときの約束として、9割以上の親が「見方(使い方)の約束を守れなかったら注意する」にあてはまると回答し、8割以上の親が「一人で使うときは大人の目の届く範囲で使う」「画面に目を近づけ過ぎない」と回答した。

一方、保護者自身のメディアの使い方をみると、1日に数回程度から10回以上、「子どもと食事をしているときにスマホを確認してしまう(母31.9%、父29.9%)」、「子どもを遊ばせているときにスマホを操作して、注意力が散漫になってしまっている(母28.7%、父25.5%)」、「子どもと顔を合わせて話しているとき、メールやメッセージを送ってしまう(母22.4%、父19.8%)」と回答しており、一部の親子では保護者のメディアの使い方で親子のコミュニケーションが妨げられている様子がうかがえる。

Q 対象のお子様がご自宅でスマートフォン／タブレット端末を利用するときの使い方やルール、あなたの行動として、以下はどれくらいあてはまりますか。

図1－17 使用ルール(6歳児期のみ) (%)

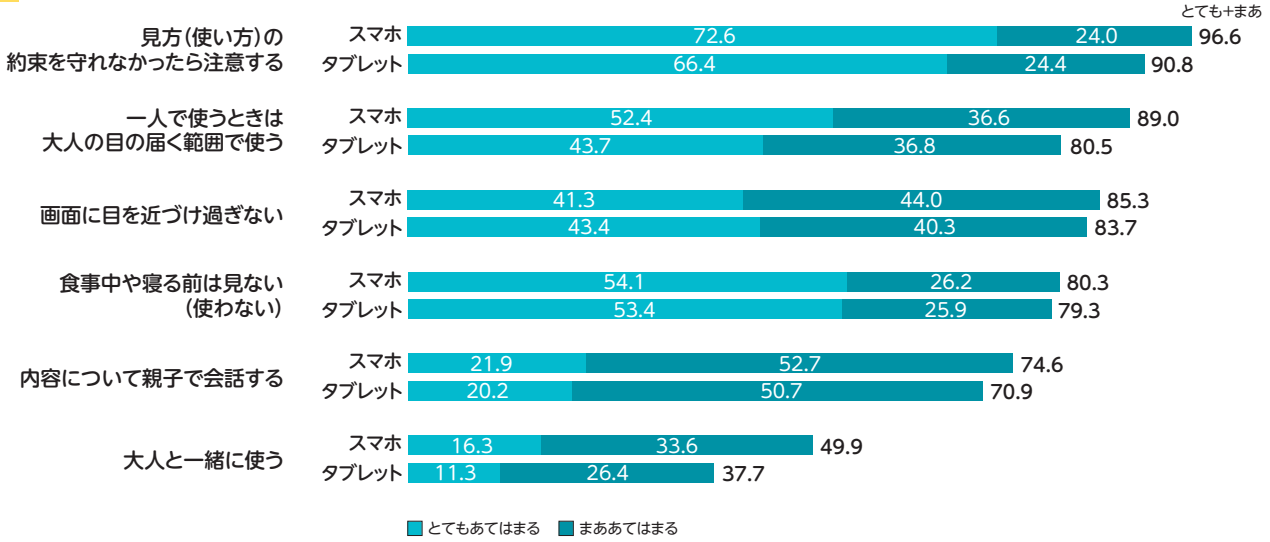
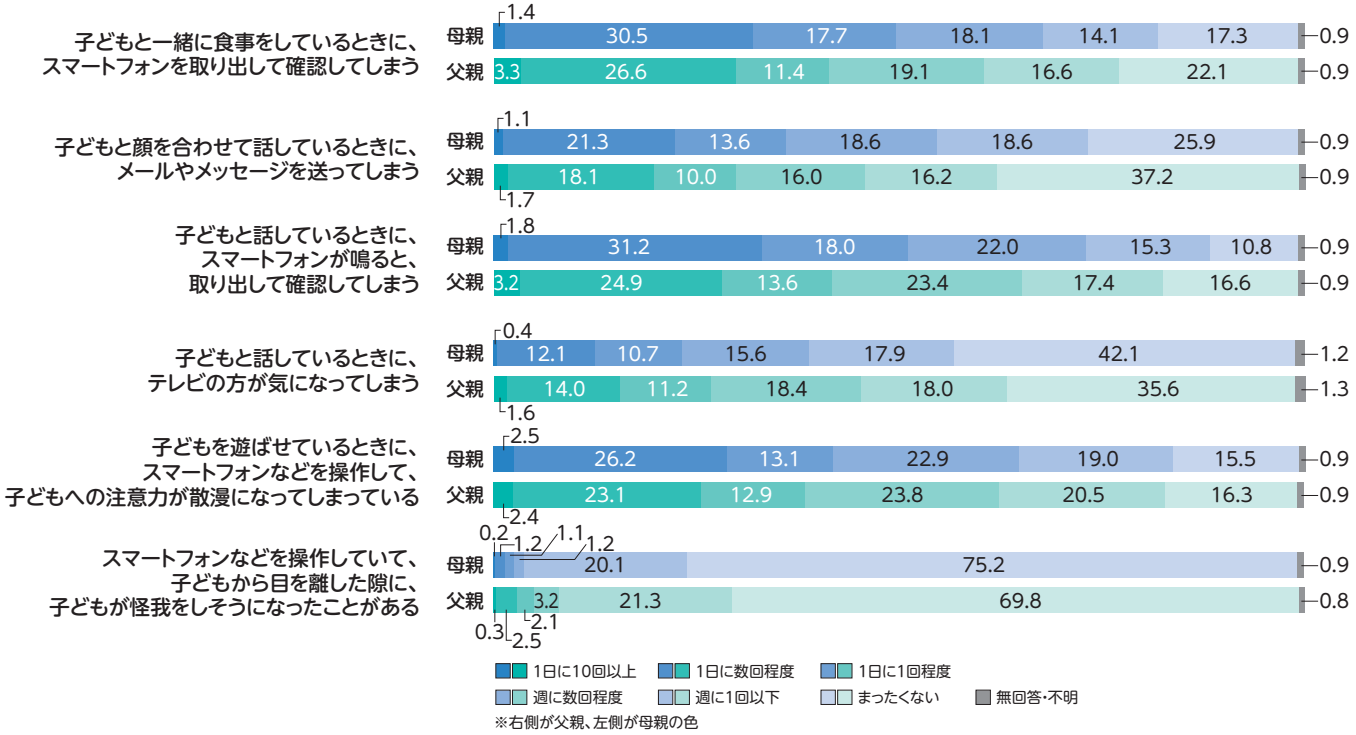


図1－18 保護者自身の使い方(6歳児期のみ) (%)



2歳児期から6歳児期にかけて、認知的な発達が進んでいく。

「言葉」では「ことば遊びができる」が2歳児期から4歳児期にもっとも増え、語彙や表現を豊かに育んでいる。「文字」をみると、ひらがなやカタカナを読んだり、書いたりすることができると回答している割合が4歳児期以降に多くなってきている。「数」では4歳児期以降で、日常生活で自分の体や身の回りの物を使って数え、1個や1本などの数え方も身につけつつある。「分類」では長さや重さの順や物事の対比への理解を少しずつ広げている様子がうかがえる。このように、幼児期に認知的な発達の変化が大きい様子がわかる。

Q 対象のお子様について、以下はどれくらいあてはまりますか。

図1－19 言葉 (%)

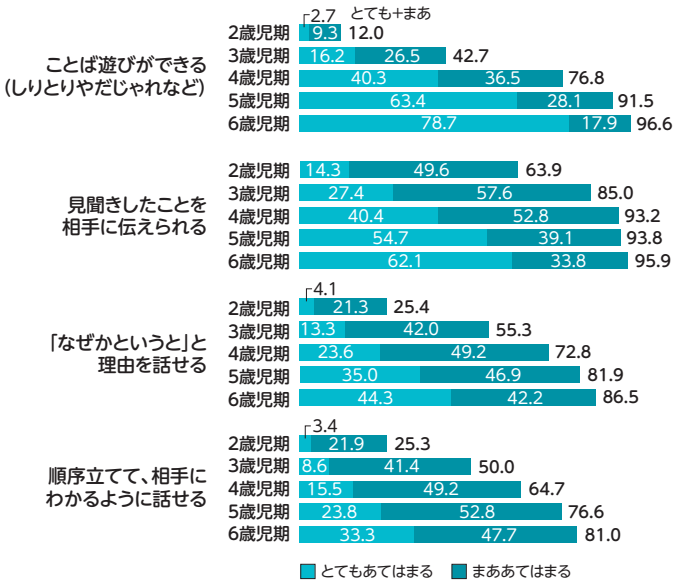


図1－20 文字 (%)

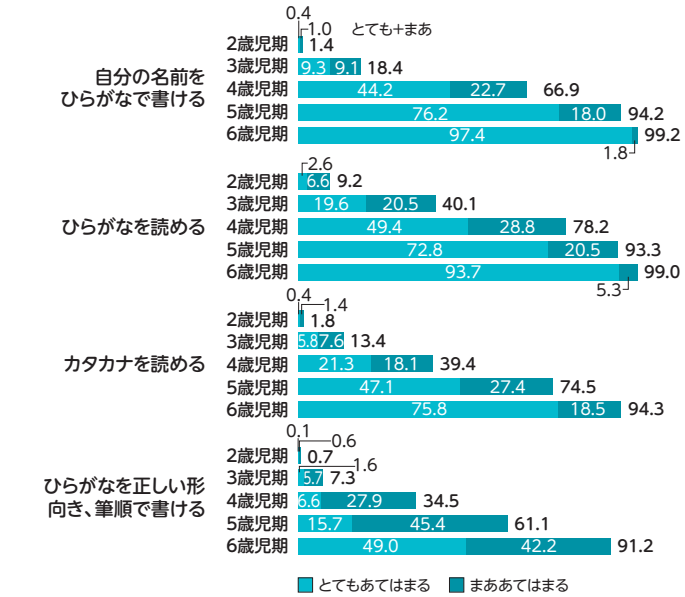


図1－21 数 (%)

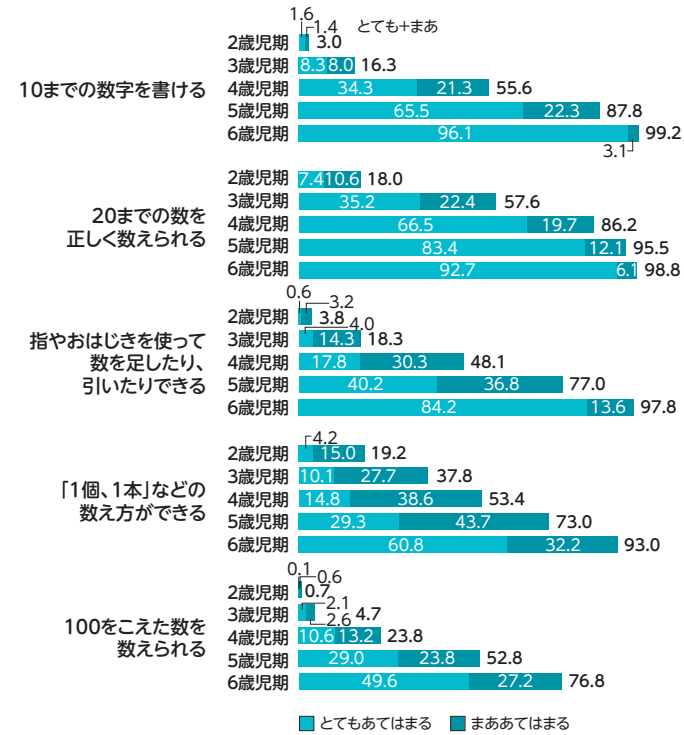
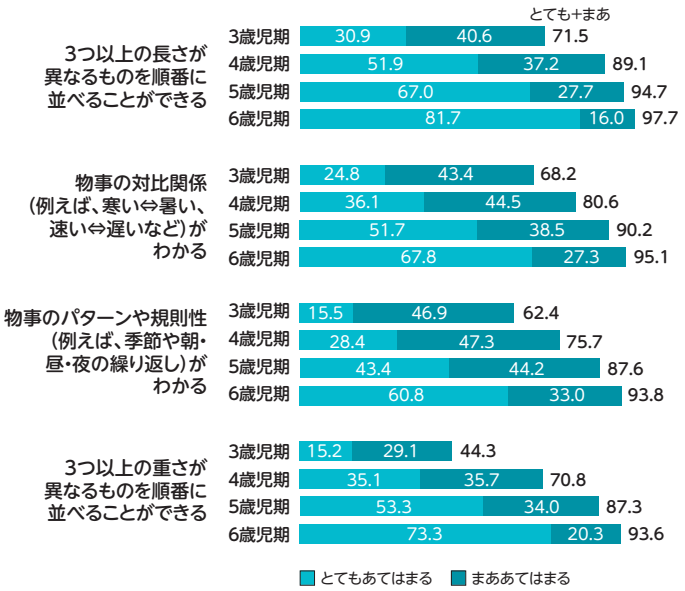


図1－22 分類 (%)



社会情動的な発達

社会情動的な発達は、２歳児期から６歳児期にかけて、少しずつ育っていく。

「自己主張」はどの調査時期においても一貫してあてはまると回答する割合が高かったが、６歳児期にやや減った。「自己抑制」は年齢が上がるにつれてあてはまると回答する割合が増え、４歳児期で８割を超えた項目が多い。「協調性」も同じような傾向がみられ、他者の状況を意識した行動が少しずつとれるようになっている。「がんばる力」では２歳児期から５歳児期にかけてあてはまると回答する割合が増えていたが、６歳児期にやや減った。

Q 対象のお子様について、以下はどれくらいあてはまりますか。

図１－23 自己主張 (%)

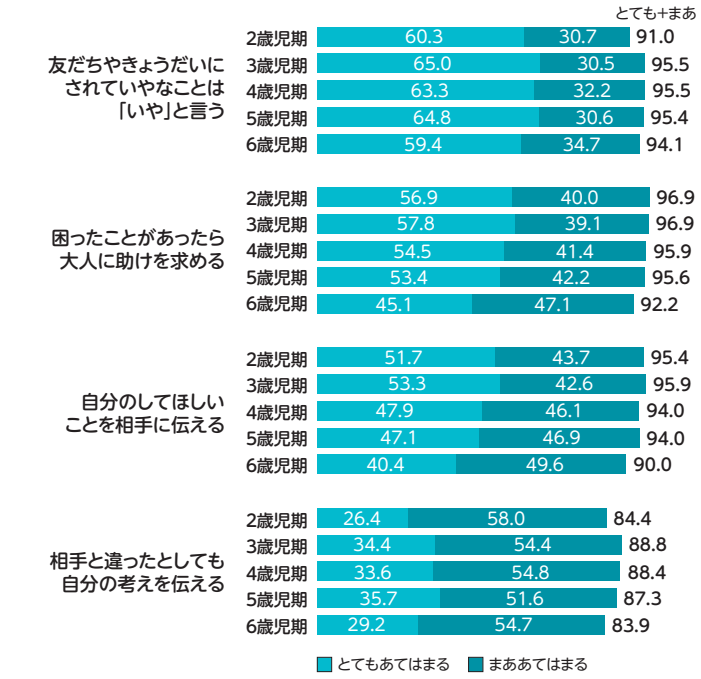


図１－24 自己抑制 (%)

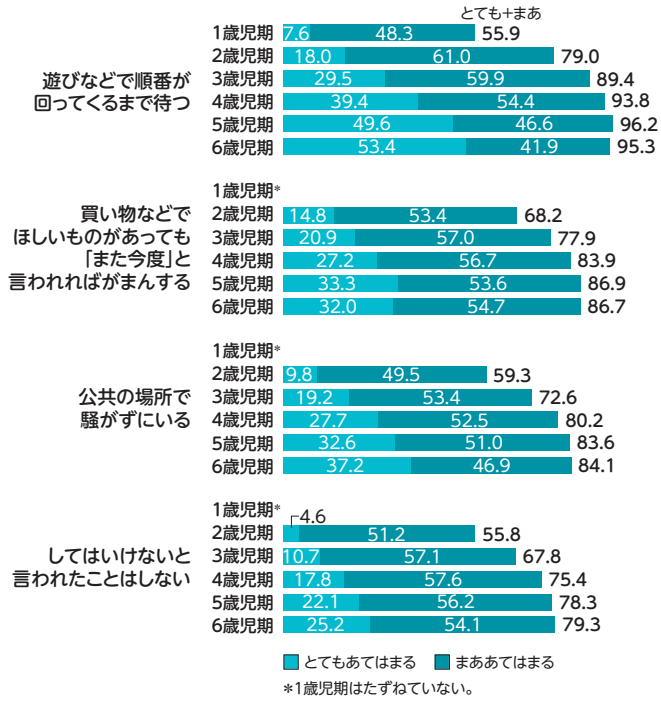


図１－25 協調性 (%)

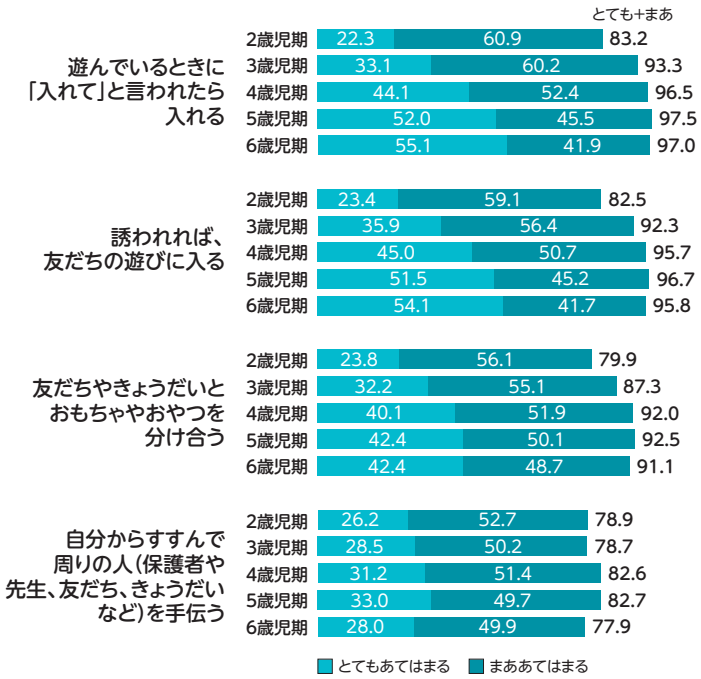
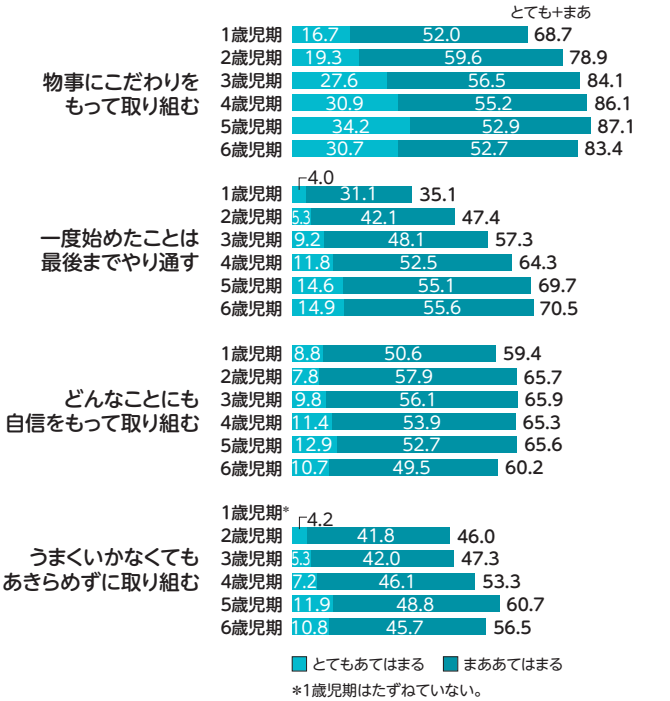


図１－26 がんばる力 (%)



特殊的好奇心や積極性は２歳児期から５歳児期にかけて少しずつ増えるが、６歳児期にやや減る。

新しいことに積極的に興味をもったり多様なことに関心を広げる「拡散的好奇心」は４歳児期から６歳児期にかけて、あてはまる割合が減る。一方、疑問に思ったことなどに対して積極的、持続的に取り組む「特殊的好奇心」と、友だちとかかわるなかで自分の気持ちを伝える「積極性」は３歳児期から５歳児期まであてはまる割合が増えたが、６歳児期にやや減った。生活や学びの場が園から小学校に変わるなかで、子どもは環境の変化に対応している段階であり、安心して集中して取り組んだり、友だちとかかわったりすることはやや控え目になっているのだろう。

Q 対象のお子様について、以下はどれくらいあてはまりますか。

図１－27 拡散的好奇心 (%)

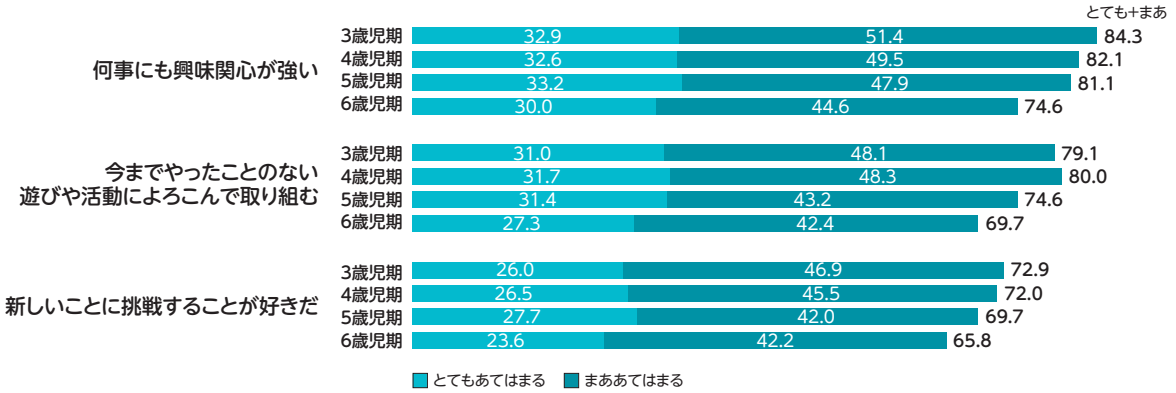


図１－28 特殊的好奇心 (%)

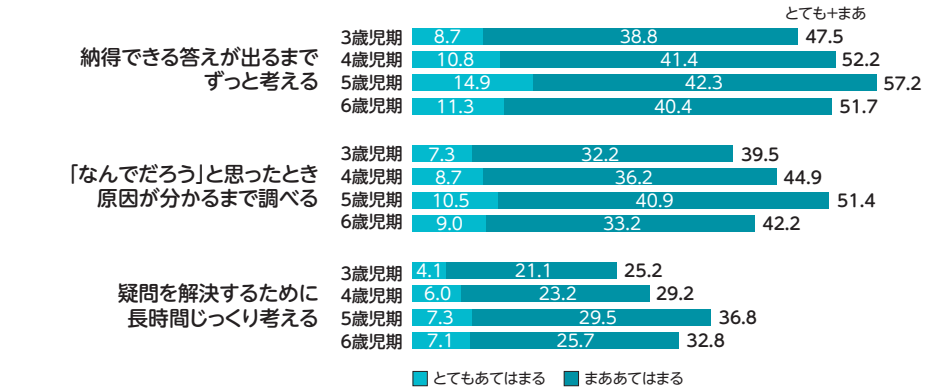
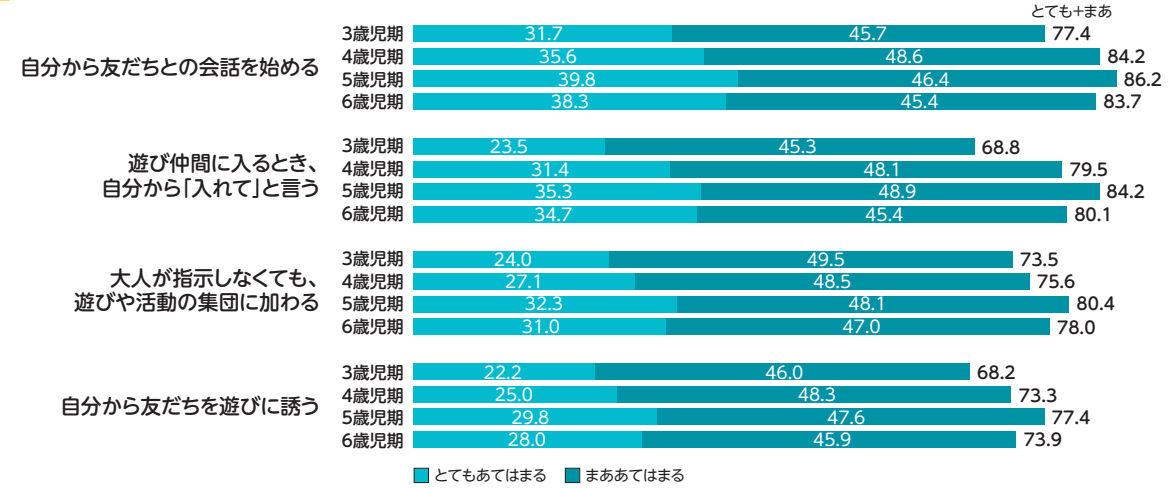


図１－29 積極性 (%)



小学校での様子・家での学習態度（6歳児期のみ）

「楽しく学校に通っている」、「宿題をやる」のは9割。「机に向かったら、すぐに勉強に取りかかる」のは6割弱。

小学校での様子は、「クラスに仲のよい友だちがいる」が94.5%、「楽しく学校に通っている」が92.2%と、多くの子どもが楽しく学校生活を過ごしている。また、家での学習の様子は、学校に関する項目の「学校から出された宿題をやる」は96.8%、「自分で翌日の学校の準備をする」は75.6%である。学習の取り組みは「机に向かったら、すぐに勉強に取りかかる」は60.2%、「勉強が終わるまで集中して取り組む」は59.3%、「大人に言われなくても自分から進んで勉強する」は54.8%と5～6割である。小1の時点での学習態度は、項目によって差があるようだ。

Q 対象のお子様について、以下はどれくらいあてはまりますか。

図1－30 小学校での様子（6歳児期のみ）(%)

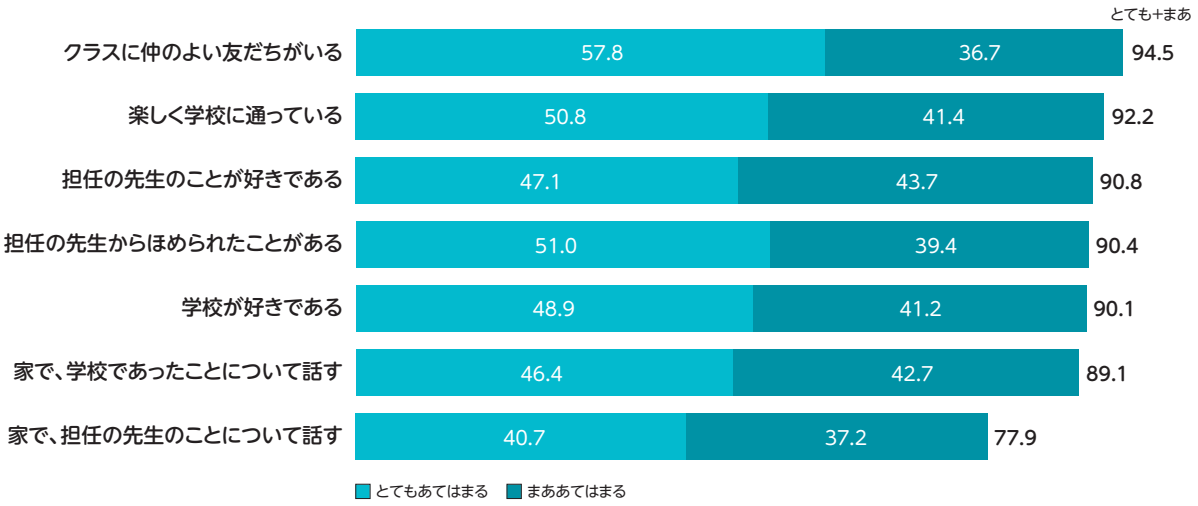
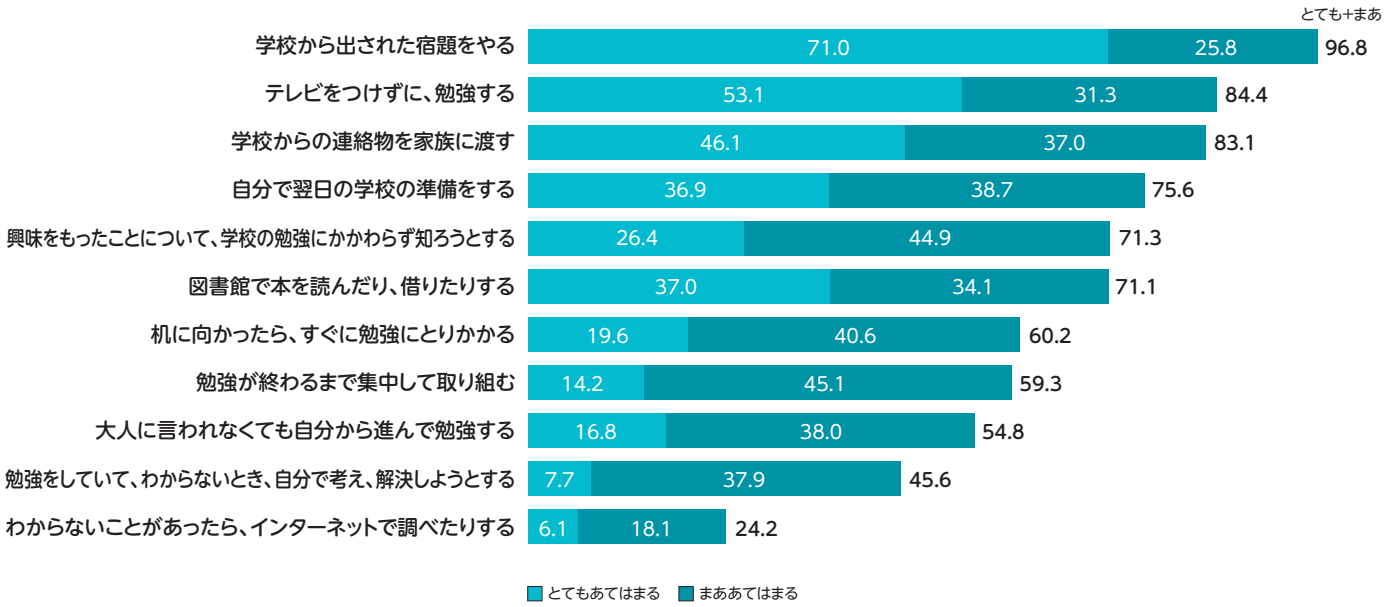


図1－31 家での学習態度（6歳児期のみ）(%)



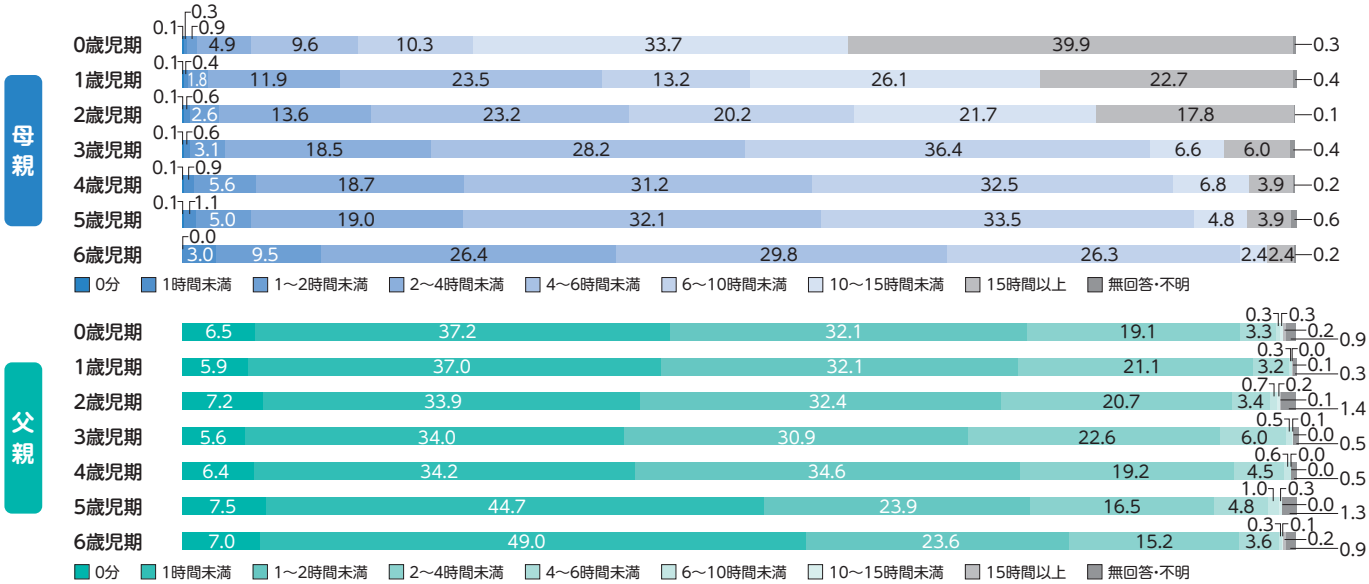
子育て時間は、子どもが小学校に入学した６歳児期になると、母親で「４～６時間未満」がもっとも多くなる。

子育ての時間について、母親をみると、３歳児期～５歳児期で「６～10時間未満」がもっとも多く、子どもが小学生となった６歳児期では、「４～６時間未満」がもっとも多くなる。父親をみると、０歳児期から４歳児期まで変わらず「１時間未満」と「１～２時間未満」を合わせて６割を超え、５歳児期から「１時間未満」が増え、６歳児期では約半数が「１時間未満」と回答した。

子育ての分担をみると、母親は「８～９割」がもっとも多く、０歳児期から５歳児期にかけて、自分の分担の割合はやや増えると感じているが、６歳児期になると若干ではあるが、「８～９割」「10割」とする回答が増える。父親は「１～２割」がもっとも多く、全年齢期で半数以上である。０歳児期から４歳児期にかけて父親が分担する割合が増えているが、６歳児期になると「0割（すべて配偶者）」が1.5ポイント増加する。

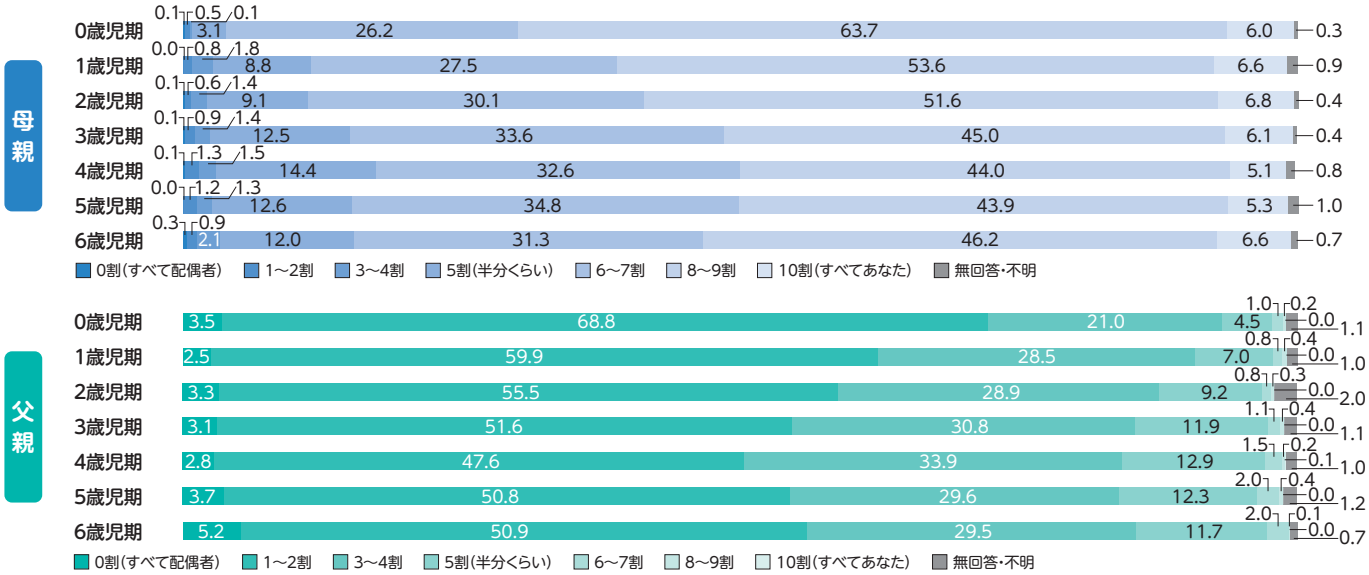
Q あなたが子育てにかける時間は、１日あたり平均してどれくらいですか。

図２－１ 子育ての時間 (%)



Q あなたと配偶者の子育ての分担のうち、あなたが分担している割合はどれくらいですか。（お子様の祖父母などの援助がある場合でも、あなたと配偶者のみの分担としてお答えください）

図２－２ 子育ての分担 (%)



家事の時間と分担

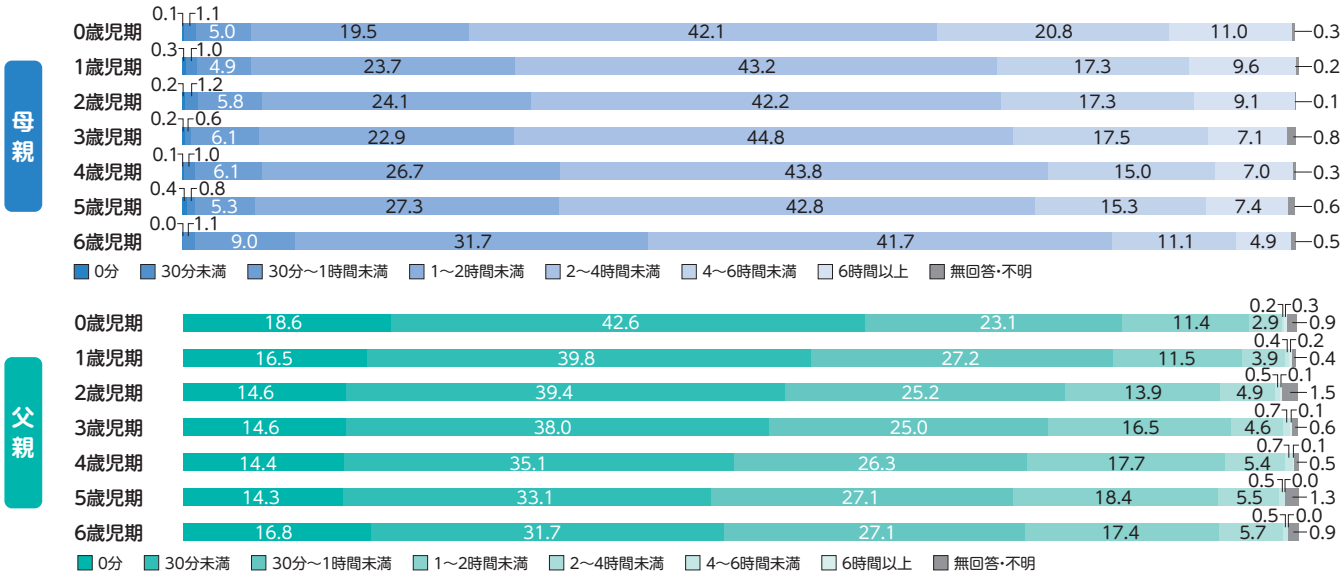
母親の家事時間は「2～4時間未満」がもっとも多い。父親の家事時間は子どもの年齢が上がると増える傾向。

母親の平日の家事時間をみると、全年齢期で大きな変化はみられず、「2～4時間未満」がもっとも多いが、子どもが小学生になった6歳児期では、就学前の5歳児期と比べて「30分～1時間未満」「1～2時間未満」と回答する割合が若干増える。父親の平日の家事時間は、6歳児期でもっとも多いのが「30分未満」で31.7%であり、0歳児期から5歳児期まで一貫して減少してきている。一方で、0歳児期から5歳児期まで減少していた「0分」は、6歳児期に微増している。

家事の分担をみると、全年齢期において母親は「8～9割」がもっとも多く、時間同様、分担割合においても大きな変化はみられない。父親は「1～2割」がもっとも多く、割合は減るものの全年齢期において5割～6割の父親が「1～2割」と回答している。

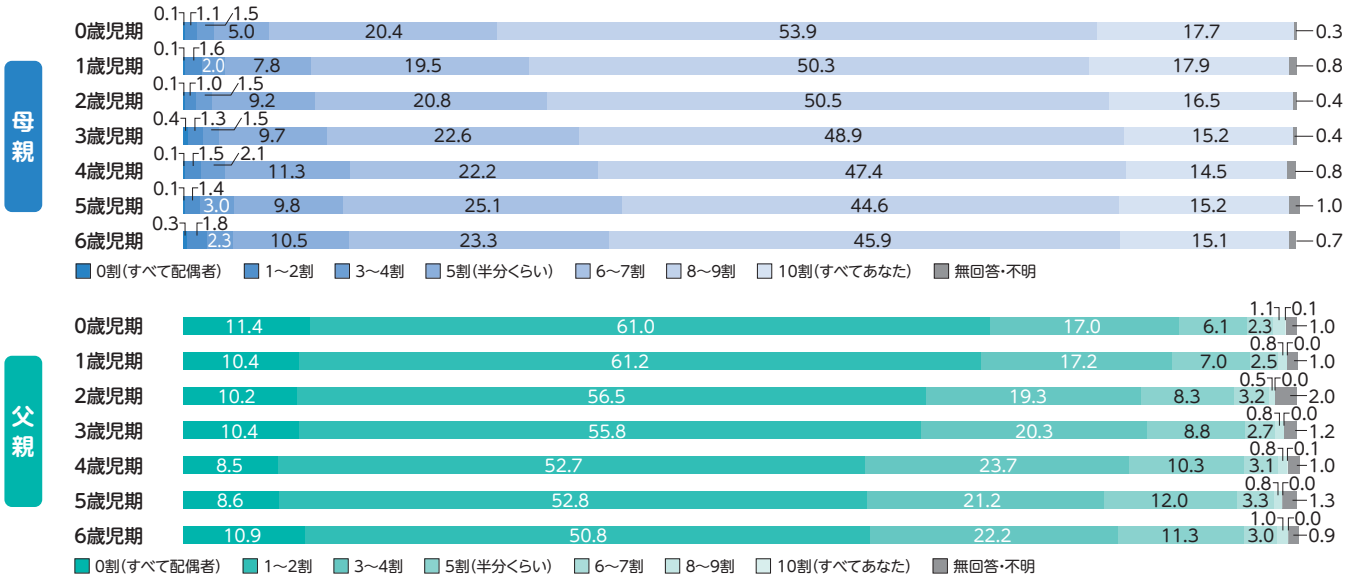
Q あなたが家事にかける時間は、1日あたり平均してどれくらいですか。

図2－3 家事の時間（平日）（%）



Q あなたと配偶者の家事の分担のうち、あなたが分担している割合はどれくらいですか。
（お子様の祖父母などの援助がある場合でも、あなたと配偶者のみの分担としてお答えください）

図2－4 家事の分担（%）



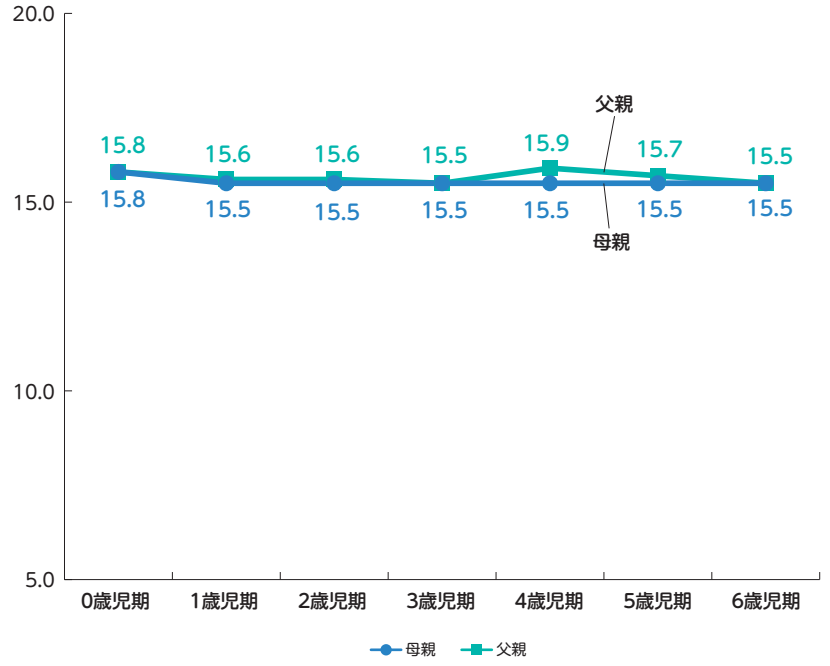
子育てに対する意識

子育てに対する気持ちは、子どもの年齢によって変化しない。肯定的な気持ちは母親・父親でほぼ同じだが、否定的な気持ちは母親がやや高い。

子育てへの肯定的な気持ちの平均値は、母親と父親でほぼ差はなく、０歳児期から６歳児期にかけてほぼ変化はない。一方、子育てへの否定的な気持ちは、父親に比べて母親はやや高く、父親も母親も、０歳児期から６歳児期にかけて、ほぼ変化がみられない。

Q 対象のお子様の子育てについて、以下はどれくらいあてはまりますか。

図２－５ 子育てへの肯定的な気持ち

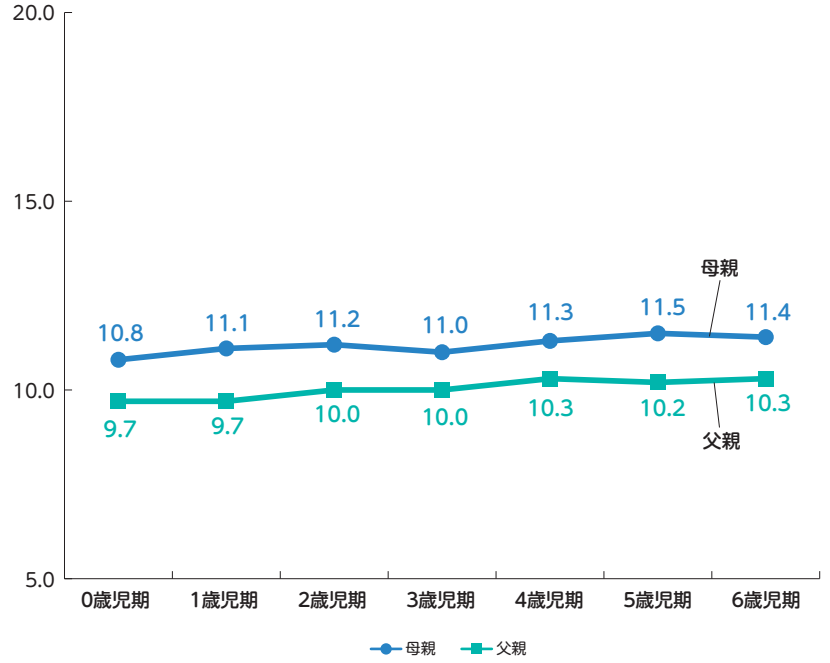


子育てへの肯定的な気持ち

・充実している
・自信がもてるようになってきた
・楽しい
・それなりにうまくやれていると思う
・子育てによって自分も成長していると思う

の５項目について、「１：まったくあてはまらない～４：とてもあてはまる」の４段階で回答を求め、５項目の回答を合計した値を「子育てへの肯定的な気持ち」の得点とした（20点満点）。

図２－６ 子育てへの否定的な気持ち



子育てへの否定的な気持ち

・いつも時間に追われていて苦しい
・子どもがうまく育っているか不安になる
・重荷に感じる
・どうしたらよいかわからなくなることがある
・他の子どもと比べて落ち込むことがある

の５項目について、「１：まったくあてはまらない～４：とてもあてはまる」の４段階で回答を求め、５項目の回答を合計した値を「子育てへの否定的な気持ち」の得点とした（20点満点）。

子育てで頼りにしている人

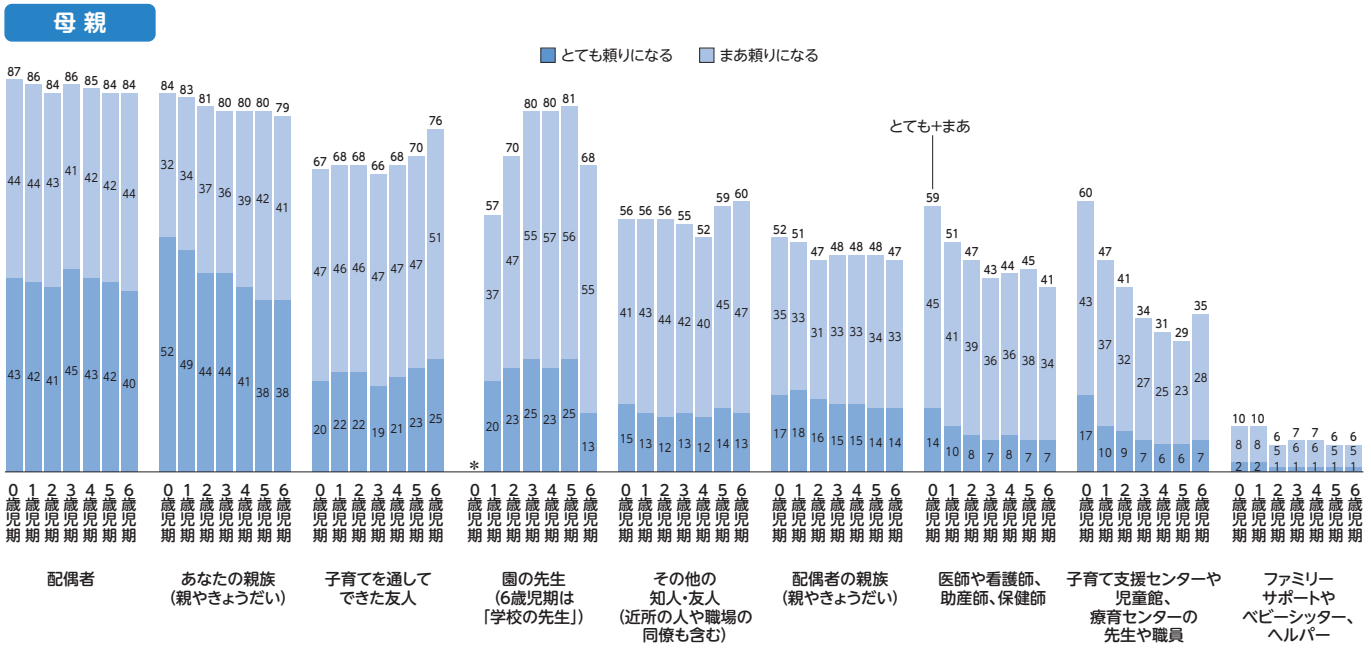
母親・父親ともに、配偶者と母親の親族を子育てで頼りにしている割合が高い。６歳児期で増えるのは、子育てでの友人と、子育て支援センターなどの先生や職員。

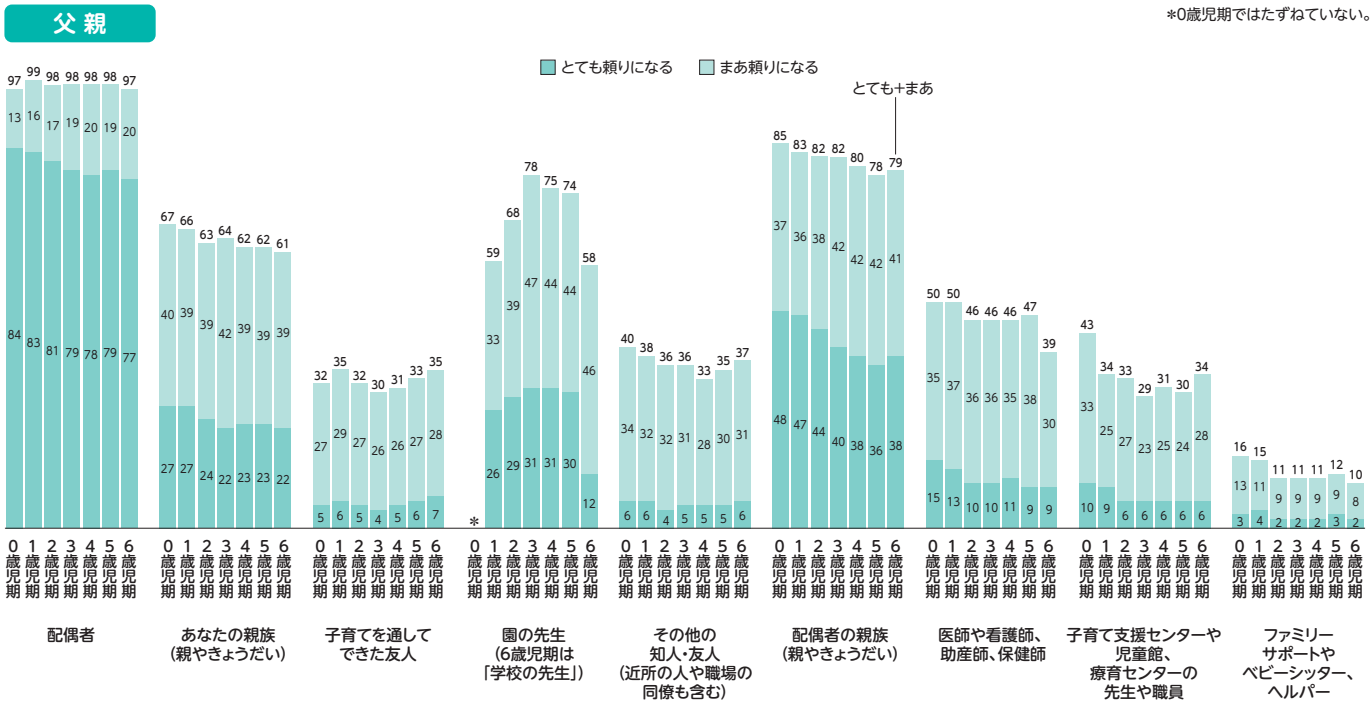
０歳児期から６歳児期を通して、母親・父親ともに、８割以上が子育てで「配偶者」を頼りになると回答している。また、６歳児期でみると、母親は「あなたの親族」が76％、父親は「配偶者の親族」が80％と、いずれも母親の親族が頼りにされる傾向にある。

６歳児期で増えたのは、母親・父親ともに「子育てを通してできた友人」と「子育て支援センターや児童館、療育センターの先生や職員」であり、減ったのは、園や学校の先生である。

Q 子育てを支えてくれる人（悩みを相談したり、子どもを預けたりできる人）として、以下の人はどれくらい頼りになりますか。

図２－７ 子育てで頼りにしている人 (%)





デジタルメディアに対する価値観

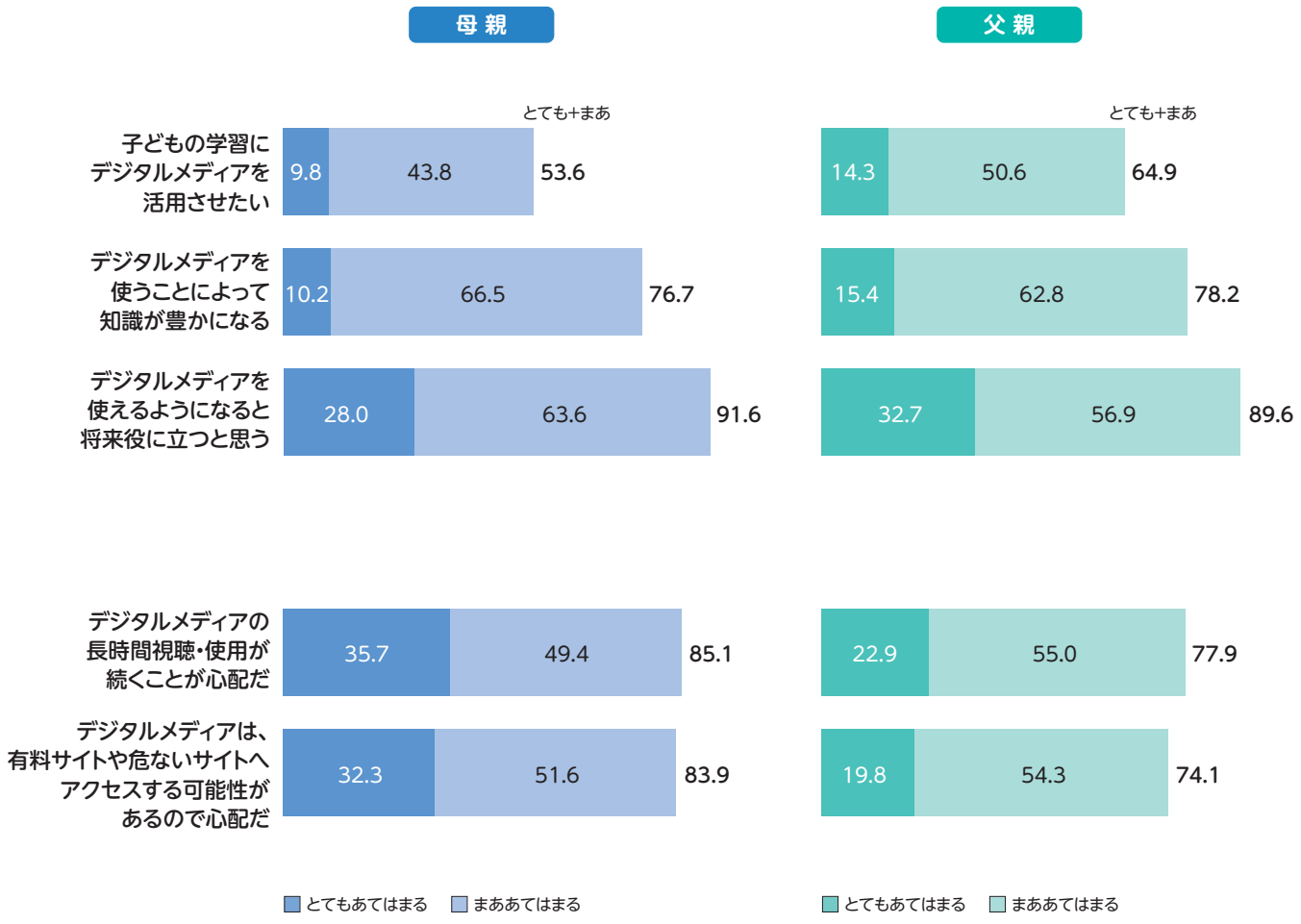
母親・父親ともに約９割が、デジタルメディアは将来役に立つと考えている。一方でデジタルメディアの使用に対する不安感は父親に比べて母親の方がつよい。

デジタルメディアへの考え方で母親・父親ともにもっとも高いのが「デジタルメディアを使えるようになると将来役に立つと思う（母91.6%、父89.6%）」である。

母親・父親で差がみられたのが、「子どもの学習にデジタルメディアを活用させたい（母53.6%、父64.9%）」で、あてはまると考えている割合は父親がより多い。一方、「デジタルメディアの長時間視聴・使用が続くことが心配だ（母85.1%、父77.9%）」「デジタルメディアは、有料サイトや危ないサイトへアクセスする可能性があるので心配だ（母83.9%、父74.1%）」については、あてはまると考えている割合は母親がより多い。

Q 対象のお子様の子育てについてのあなたの考えとして、以下はどれくらいあてはまりますか。

図２－８ デジタルメディアに対する考え方（６歳児期のみ）(%)



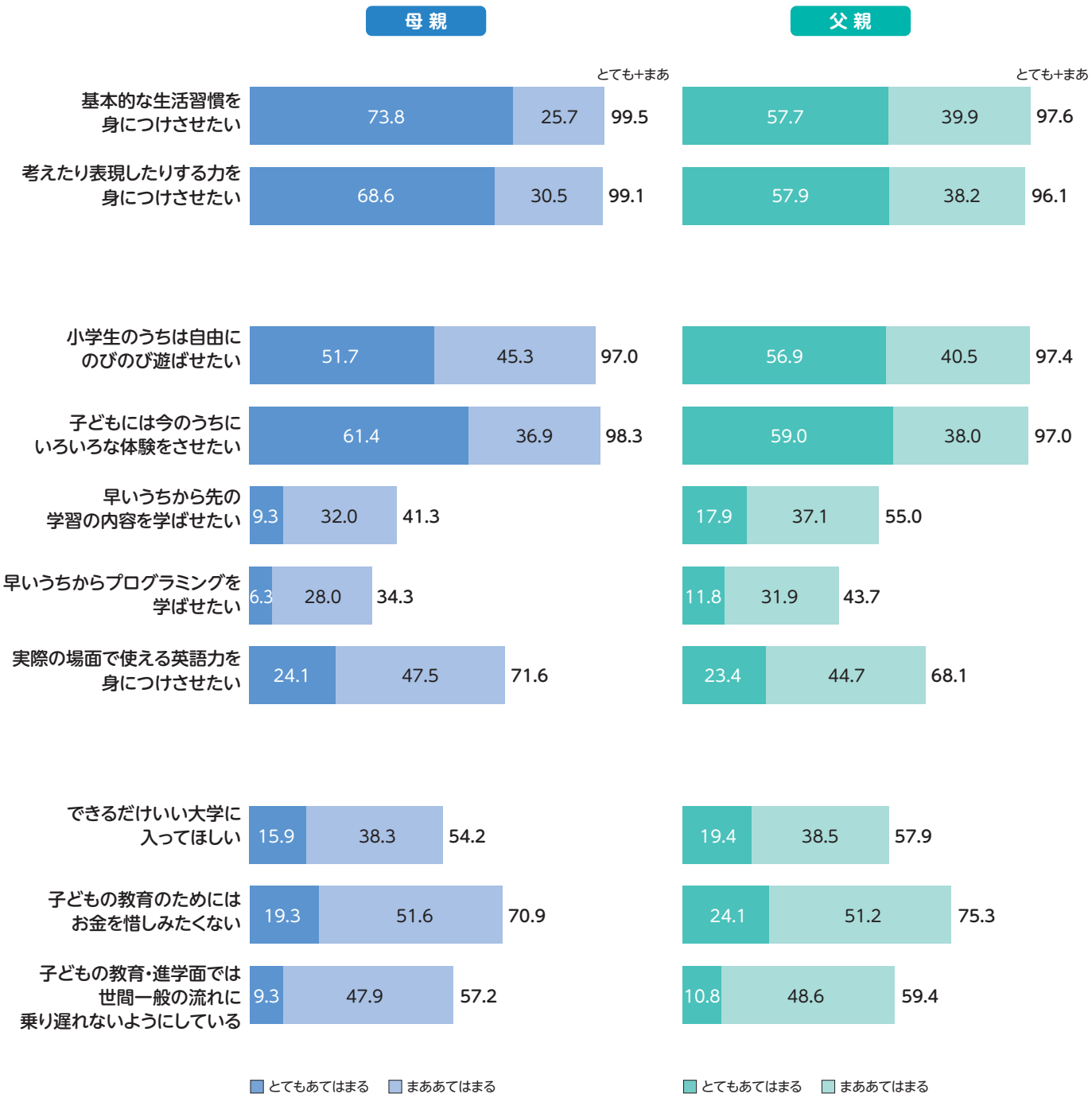
子育て・教育に対する価値観

母親・父親ともに、９割以上が基本的な生活習慣、考えたり表現する力、いろいろな体験、のびのび遊ぶことを望んでいる。

母親・父親ともに９割以上が「基本的な生活習慣を身につけさせたい」「考えたり表現したりする力を身につけさせたい」「小学生のうちは自由にのびのび遊ばせたい」「子どもには今のうちにいろいろな体験をさせたい」と回答している。また、「実際の場面で使える英語力を身につけさせたい」と「子どもの教育のためにはお金を惜しみたくない」も７割前後である。さらに、母親・父親ともに、子育て・教育への価値観は同じ傾向にあることもわかる。

Q 対象のお子様の子育てについてのあなたの考えとして、以下はどれくらいあてはまりますか。

図２－９ 子育て・教育に対する考え方（６歳児期のみ）(%)



学校環境への評価（６歳児期のみ）

９割の母親が、小学校で子どもの教育を十分に行ってもらえていると評価している。一方、学校に相談できる教職員がいると考えているのは約４割。

小学校への入学にあたって、入学準備がしっかりできたと考えているのは８割以上で、多くの人が入学準備をおこなっていた様子がうかがえる。

担任の先生の子どもへの対応や学校の教育活動については、８割以上が評価している。一方、「子育てについて相談できる教職員がいる」のは約４割だった。また、子育てについて相談できる（母親自身の）友だちが同じ学校にいると回答した割合は約６割であった。

Q 対象のお子様の学校生活について、どのように感じていらっしゃいますか。

図２－10 入学準備（６歳児期のみ）(%)

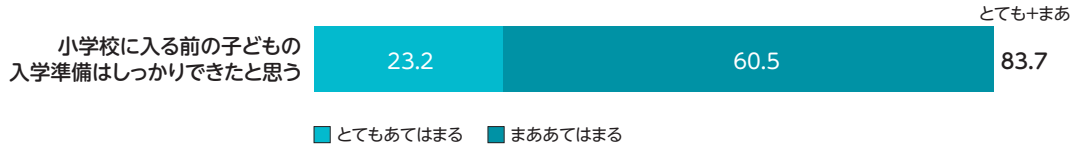


図２－11 教師の関わり方への評価（６歳児期のみ）(%)

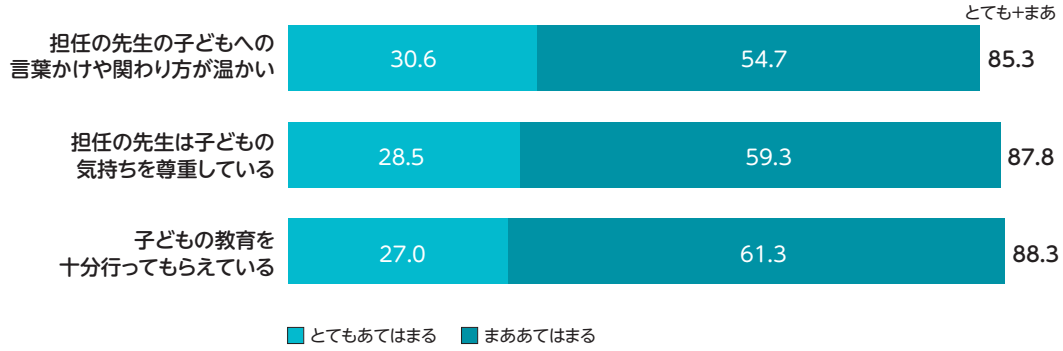
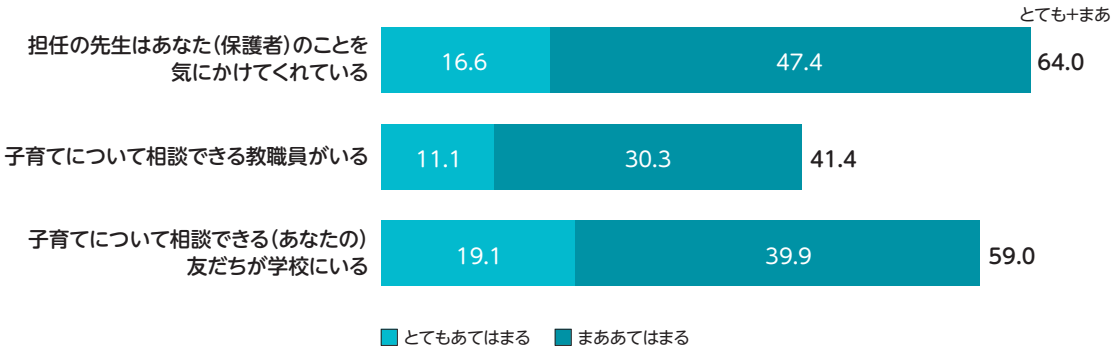
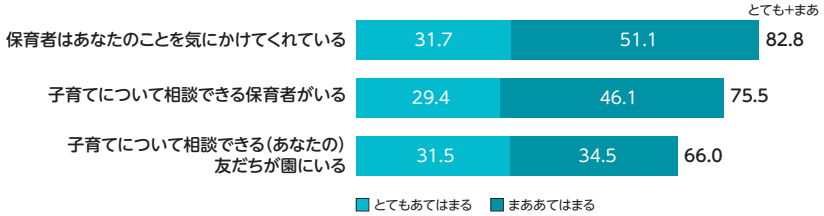


図２－12 担任の先生・ママ友との関係（６歳児期のみ）(%)



参考資料

１年前（５歳児期）(%)



母親は０歳児期から６歳児期にかけてパート・アルバイトが増加。週あたりの労働時間は、母親は少しずつ増える。

母親の就労状況は、１歳児期から６歳児期を通して、「正社員・正職員」の割合はほぼ変わらないが、「パート・アルバイト」の割合は増えている（図２－13）。
働いている父親の週あたりの労働時間についての回答分布は０歳児期から６歳児期までほぼ変わらない（図２－14）。

Q 現在の仕事のことについておうかがいします。

図２－13 母親の就労状況 (%)

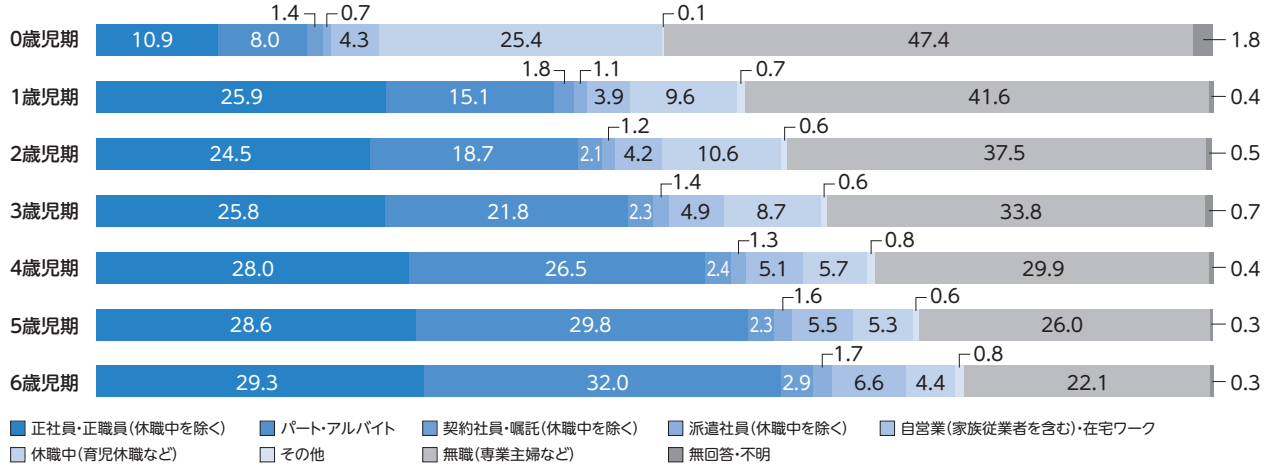
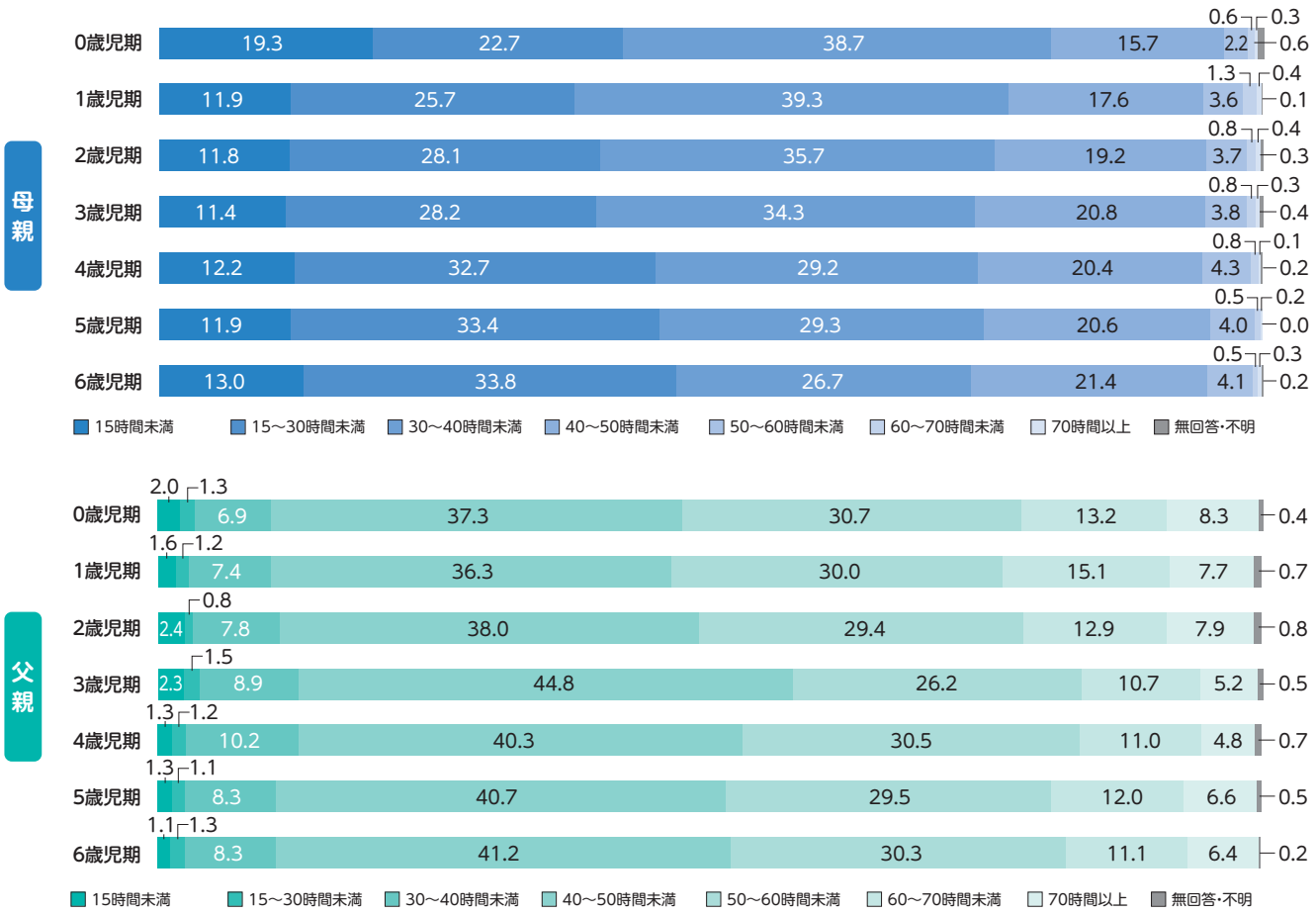


図２－14 週あたりの労働時間 (%)



東京大学CEDEP・ベネッセ教育総合研究所　共同研究

「乳幼児の生活と育ち」研究プロジェクト

調査企画・分析メンバー

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（CEDEP）

遠藤利彦（東京大学CEDEPセンター長・教授）
大久保圭介（国士舘大学講師・CEDEP協力研究者）
江見桐子（東京大学博士課程・CEDEP特任研究員）
野澤祥子（東京大学CEDEP准教授）
則近千尋（東京大学博士課程・CEDEP特任研究員）

ボード会

秋田喜代美（学習院大学教授）
島津明人（慶應義塾大学教授）
佐藤香（東京大学教授）
小崎恭弘（大阪教育大学教授）

ベネッセ教育総合研究所

野澤雄樹（所長）
高岡純子（主席研究員）
松本聡子（研究員）
木村治生（主席研究員）
持田聖子（主任研究員）

研究プロジェクト ウェブサイトのご案内

東京大学大学院教育学研究科附属
発達保育実践政策学センター
https://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp

ベネッセ教育総合研究所
https://benesse.jp/berd/

「乳幼児の生活と育ち」プロジェクト2023　ダイジェスト版

発　行　日：2024年10月31日
発　行　人：野澤雄樹
編　集　人：木村治生
発　行　所：㈱ベネッセコーポレーション　ベネッセ教育総合研究所
編 集 協 力：田村徳子
デ ザ イ ン：株式会社フライ・ネクスト

0TT001
©Benesse Educational Research and Development Institute
無断転載を禁じます。